Kita-re
北近畿地域連携センター

平成29年度

「福知山公立大学開学記念連続講演会」報告書

地域のための福知山公立大学に期待するもの

～福知山公立大学を使いこなすために～

目次 Contents

はじめに 2

福知山公立大学開学記念連続講演会の開催趣旨と概要について 3

福知山公立大学開学記念連続講演会

1 第1回 篠山市
『地方創生』時代の地域住民と自治体職員
求められる発想と行動の転換 5

2 第2回 養父市
持続可能な交流型ツーリズム
来訪者と受入地域の共生を目指して 21

3 第3回 丹波市
プレイス・ブランディングによる地方創生
丹波市における農のブランド化の挑戦 37

4 第4回 豊岡市
観光とアートの親和性 51

5 第5回 朝来市
地域自治協議会の始めかた・進めかた・育てかた 65

はじめに

本学は「市民の大学、地域のための大学、世界と共に歩む大学」を基本理念に掲げて、平成28年4月の開学以来、地域の皆様からのご支援・ご協力をいただき、教育・研究と人材育成を進めて参りました。

地方公立大学としての本学が、北近畿地域全体の社会的資源として有効に機能し地域への貢献を実感していただくためには、地域社会との緊密な連携と協力が不可欠であります。そこでまずもって福知山公立大学が設立されたこと、そして大学が地域の皆様にとって使い勝手の良い「知の拠点」であることをご理解いただくために、北近畿地域の自治体において「福知山公立大学開学記念連続講演会」を開催いたしました。

昨年度は京都府内の北部5市2町、本年度は兵庫県内の北部5市で北近畿の活性化、地域創生の実現をメインテーマに据え、それぞれの地域で関心の高い個別テーマを設定し、著名な外部講師を招聘して基調講演を行いました。また、基調講演を受け、外部講師、本学教員、各市の首長による鼎談（ていだん）やパネルディスカッションを実施し、闊達な意見交換をしていただくことにより、公立大学と市民生活との関係を具体的に理解していただく機会を設けました。その結果、本年度は全5回の講演会で600人を超える来場者にお越しいただき、盛況のうちに終えることができました。

このたびの「福知山公立大学開学記念連続講演会」におきましては、関係各位のご協力のおかげで成功を収めることができましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。今回の講演会をきっかけに、大学と地域の皆様との交流が活発になることを切望しております。

福知山公立大学 北近畿地域連携センター長
富野　暉一郎

【趣旨】

福知山公立大学の認知度を上げるとともに、地域社会に貢献する大学の姿勢や大学の持つ人的資源を広く周知することを目的として、平成28年度より、北近畿地域で各自治体が希望するテーマにより講演会を実施し好評を得てきました。

平成29年度は兵庫県北部地域５市（篠山市、養父市、丹波市、豊岡市、朝来市）で実施しました。内容はゲスト講義による基調講演、対談は各市町の市長と本学の教員による鼎談という構成としました。

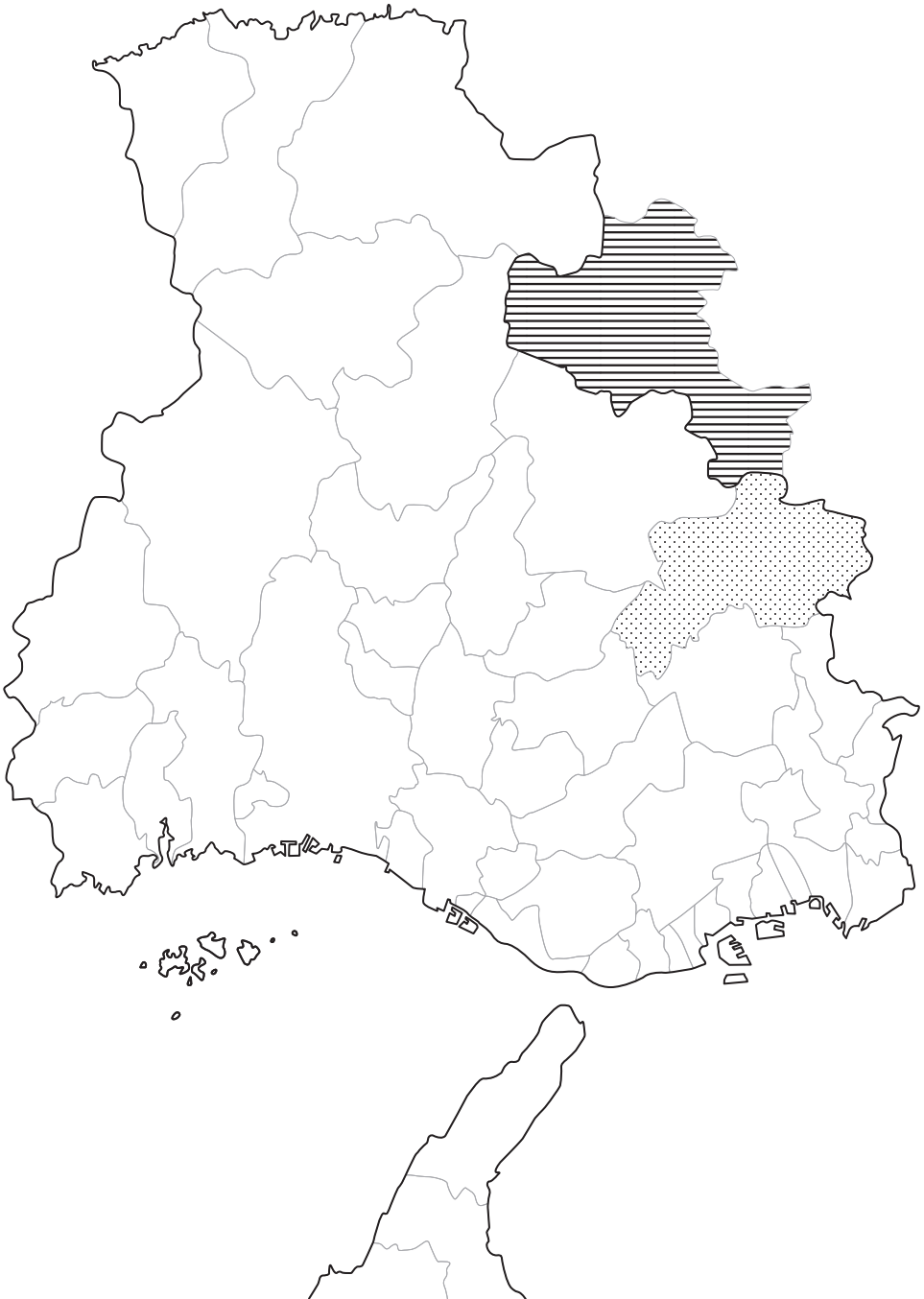
【各講演会の共催・テーマ・日時・会場・講師・参加者数】

共 催	テーマ	日 時	会 場	講師（講演者）	参加者
第1回 篠山市	『地方創生』時代の地域住民と自治体職員～求められる発想と行動の転換	9月29日（金） 13:30～16:00	篠山市民センター 多目的ホール	九州大学大学院 法学研究院 准教授 嶋田暁文氏	189名
第2回 養父市	持続可能な交流型ツーリズム～来訪者と受入地域の共生を目指して～	10月21日（土） 14:30～17:00	養父市立 おおやホール	一般社団法人そらの郷 事務局次長 にし阿波観光圏 観光地域づくりマネージャー 出尾宏二氏	84名
第3回 丹波市	プレイス・ブランディングによる地方創生～丹波市における農のブランド化の挑戦～	11月12日（日） 13:30～16:00	丹波市立 山南住民センター やまなみホール	関西大学 総合情報学部 教授 徳山美津恵氏	76名
第4回 豊岡市	観光とアートの親和性	12月9日（土） 13:00～16:00	豊岡市役所 大会議室	劇作家・演出家 平田オリザ氏	110名
第5回 朝来市	地域自治協議会の始めかた・進めかた・育てかた	2月4日（日） 13:30～16:30	あさご ささゆりホール	IIHOE 人と組織と 地球のための国際研究所 代表者 川北秀人氏	200名

開学記念連続講演会（篠山市）

『地方創生』時代の地域住民と自治体職員

求められる発想と行動の転換



1

福知山公立大学
開学記念連続講演会
第1回 篠山市

「地方創生」時代の地域住民と自治体職員

求められる発想と行動の転換

2017
9/29(金)

13:30〜16:00
篠山市民センター 多目的ホール
入場無料 ※定員300名 申込不要

講師

嶋田 暁文(あきふみ) 氏
九州大学大学院法学研究院 准教授

1973年、島根県安来市生まれ。中央大学法学研究科博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員(PD)、地方自治総合研究所非常任研究員を経て、現在、九州大学法学研究院准教授。専門は、行政学、地方自治論。著書に、(単著)『みんなが幸せになるための公務員の働き方』(学芸出版社、2014年)、(共編著)『地方自治の基礎概念』および『分権危惧論の検証』(公人の友社、2015年)など。そのほか論文多数。

Shimada Akifumi

嶋田 暁文 氏

富野 暉一郎 氏
福知山公立大学副学長 兼
北近畿地域連携センター長

1944年、神奈川県逗子市生まれ。龍谷大学名誉教授。元逗子市長。専門は地方自治。

×

酒井 隆明 氏
篠山市長

1954年、兵庫県篠山市生まれ。弁護士。元兵庫県議会議員(3期)。2007年2月より篠山市長(現在3期目)。

開学記念鼎談(ていだん)

福知山公立大学
The University of Fukuchiyama

兵庫県篠山市黒岡191 P有

会場 MAP 篠山市民センター

お問い合わせ 北近畿地域連携センター Kita-re

0773-24-7151
〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
FAX ／ 0773-24-7152
Mail ／ kita-re@fukuchiyama.ac.jp

●共催 福知山公立大学・篠山市

講演（要約）

○嶋田氏　　地方創生という話が出てきたのは２０１４年です。その後、「１億総活躍社会」とか「ひとづくり革命」などというキャッチフレーズを安倍政権が相次いで出してきたので、今や地方創生は忘れ去られた感があります。この地方創生の動きが本格化したのは、２０１４年５月に出た「増田レポート」がきっかけです。これは、子供を出産する可能性の高い若年女性の減少率をもとに、将来の我が国の人口減少を予測したもので、２０４０年までに人口が半減する「消滅可能性都市」や、１万人を切る「消滅する都市」も明示されていて、篠山市も「消滅可能性都市８９６」の一つに挙げられています。

この「増田レポート」を受けて、同年１１月２８日に「まち・ひと・しごと創生法」が施行され、国から自治体に対し「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の地方版をつくりなさいと要請が出されました。そして、国が指定した２０１６年３月までに、４７都道府県全てと、１，７３７の市町村、９９．８％の自治体が、国の示した指標をもとに地方創生戦略を策定しましたが、その大半は早計なものでした。地方創生はじっくり腰を据えて取り組むべき課題であり、軌道修正をし、足元を見つめ直す必要があると思います。

では、改めて地方創生を進めるに際し、どういう認識が必要か。人口が減っても安心して暮らせる地域づくりを心がけること、一発逆転的なやり方でなく、地道な取り組みをすること、第三者的視点やマンパワーという点から外部の人材を生かすことを心がけることなどです。

特に重要なポイントは集落同士の連携を通じたネットワーク数の確保です。ネットワークの数というのは、いわば“頼れる人の数”です。これが減るということは、鳥獣対策や農作物の収穫や出荷、草刈り等の農林地管理、空き家の管理・修復、祭りの開催、雪かき、病院までの移動等の生活支援、補助金申請などをお願いできる人が減ることを意味するわけで、その地域で人々が安心して暮らせなくなることを含意しています。そこで、一つ一つの集落の人口が減っていても、それらを結びつけることでネットワーク数を確保するわけです。

また、都市住民出身者、企業、学生、大学などと結びつくこと、つまり外部の力を借りることも大事です。それから行政との協働も不可欠です。

こういう取り組みで定住・移住政策の基礎をつくっていくことが必要です。

実例を紹介しますと、島根県雲南市は、小規模多機能自治で先進的な実践をしています。例えば、各協議会が交付金を使って、それぞれスタッフを雇える形をとっています。この方式だと、行政に

過度な負担を求めずに済むというメリットがあります。また、同市では先進的な実践は公表され、他の協議会の気づきや発奮にもつながっています。

こういう取り組みは高齢化が進んでいるとできないと言われますが、同市の波多コミュニティー協議会は、高齢化率４９．３％であるにもかかわらず、廃校を利用して販売所をつくり、黒字を生んでいます。そして、販売所は地区の人々の交流の場にもなっています。ただ、こういうことをするためには７０代前半までの動ける方が必要です。

篠山市の広報に「自分のこととして考える定住促進」というコーナーがあり、「１％理論」というのが紹介されています。これは、早くから過疎化が進んでいる島根県の中山間地域研究センターが集落ごとの家族構成調査をもとにはじき出したものです。それによれば、たとえば、平均人口１，３７０人の各エリアにおいて、子連れ夫婦３０代前半男女と４歳児以下の幼児と、若者夫婦２０代前半男女とがそれぞれ平均２．４組、計１０人程度ずつ毎年流入すると高齢化率上昇をとめることができ、これに加えて６０歳前半の夫婦が毎年２．４組流入すると人口総数の減少の緩和、または安定化が実現できます。要するに、地域人口の安定化には、今の人口の１％程度の流入でいいということです。もちろん、これは平均的な数値であって、地域によって違いがあります。篠山市全体でいうと、人口の１％

は４００人程度、各自治区単位だと２人程度の移住･定住を毎年増やしていくだけですので、かなり現実的な数字です。なので、焦る必要はさほどないわけです。

ただ、そこで移住･定住のネックとなってくるのが、住宅と仕事とコミュニティーの３つです。

住宅については空き家を活用する。コミュニティについては、地域になじんでもらうために、篠山市でもやっているような定住アドバイザーを置く試みがあります。

一番のネックは仕事です。建設業とか運送業はどこでも人手がなくて困っていますが、移住者が求めるのは都会にはない仕事で、そこが難しいところです。島根県では、移住を１％増やすためには所得も１％増やさないといけないという考えから、「地域内経済循環」という発想を生み出しました。地域住民の家計データをもとに地域外で消費している分をはじき出し、それを地域内で消費することによって地域に仕事を生み出そうという試みです。月３万円の仕事を１０個集めて、３０万円確保するなどいろんなスタイルが模索され実践されています。

ただ、こうしたことを試みる前に注意すべき点は、行政自身が「地域内経済循環」を阻んだり、有用な仕事を地域からなくしたりしていないかを再検討することです。たとえば、佐賀県武雄市では、指定管理者制度で、図書館でＴＳＵＴＡＹＡが店を出しているところがあります。本の貸し出しも来館者も増えていますが、反面、ＴＳＵＴＡＹＡの収益は全部東京に流出し、地域の本屋の本が売れなくなる。また、指定管理にすれば、図書館の司書は非正規となって、地域の有用な仕事がなくなってしまうというマイナス面もある。

「外部の力を借りる」ということに話を移しますと、域学連携が外部の人材を得るための有用な取り組みです。この点、実は、篠山市と神戸大学農学部の連携は、全国でも先進的な実践として大いに注目されています。ここに福知山公立大学が入ってくれば、篠山市は域学連携のまさにトップランナーとして、ますます注目されていくのではないかと思います。

こうしたことを実現するためには、「住民と行政の協働」が不可欠です。そのためには、地域住民と自治体職員の両方が、考え方、見方を変えていく必要があります。

まず地域住民に求められることは、厳しい現実に直面しても決して諦めないことです。それから、行政に要求を丸投げせず、まず地域内部で調整をした上で行政に持ち込むと行政も対応しやすい。住民が頑張れば行政とのいい関係が生じます。

集落点検等を通じて、改めて地域の要求、将来の見通しを明確にした上で、地域で何ができるのか、何をしなければいけないのか考える。また、自分たちで手におえないことについては、どういう外部の人材が必要なのかを明確にしていただければと思います。

外部人材の採用に関しては、受け入れた人を支え、過剰な期待をしすぎないことが大事です。私自身、大学のゼミで地域に入っています。ところが、過剰な期待をされたり、きつい言葉をかけられたりすることがあります。外部の人材が継続的に力を発揮していくためには、地域住民の支えが要ります。

島根県海士町では、外部の人材を受け入れるに際し、仮にずっと海士町にいなくなっても海士町のことを大事に思ってくれていればそれだけで十分という柔軟な姿勢で優秀な人材の受け入れに成功しています。海士町を大事に思ってくれていれば、各地で海士町を宣伝してくれるであろうし、ネットワークも続けてくれるはずというわけです。

最後に、自治体職員に求められる働き方について申し上げたいと思います。地方創生の主役は、もちろん住民ですが、うまくいっている地域を見ると、住民だけでなくて、それを支えている自治体職員がいます。住民に勇気と元気を与えて流れを作り出し、見えないところで頑張る住民をフォローして支え、周りの反発を抑え住民が頑張るための条件整備をするといった職員です。住民の中には、意識が高過ぎて元々の住民としっくりいかない都会からの移住者もいますが、こうした人を地域になじませる橋渡し役として職員が頑張れるかどうかも大きなポイントになってくると思います。

また、「できない理由」を挙げて逃げるのではなく、住民の幸せを第一に考え、できる方法を懸命に模索する職員、住民に寄り添い逃げない職員、こういった職員がいるかどうか、増えるかどうかが地域の将来にとって極めて重要だと思います。

こうした職員が増えるためには、従来の前例踏襲ではだめで、目標なり夢を置いて、「この夢を実現するために、今、何をすべきか」という思考を徹底することだと思っています。私の好きな言葉に「夢なんか実現しないという人もいるが、実は夢しか実現しない」というのがあります。自治体職員は地域の夢を持たなければいけないと、私は考えています。自治体職員の多くは1年目は無我夢中ですが、3年目ぐらいになると、組織のことや課題を乗り越える大変さももわかってきて、諦めの気持ちが生じますが、諦めずに解決策を考えていただきたい。

自治体職員の本来の仕事は、まちをつくる、住民を幸せにする、地域をよくすることであり、そのために雇われているわけです。仕事は分業の形ですが、分担している業務だけしていればいいということではありません。

自治体の職員は「○○したいけど難しい」で終わりがちですが、今、求められているのは「難しいけど○○したい」という姿勢です。合併等で業務量が増え、職員が現場に出なくなっていますが、地域に出て現場の実情を知り、地域住民と一緒に考えてほしいと思います。職員は常に100点満点を目指しがちですが、時には85点で済ませられるものはその程度にとどめ、余力を大事な仕事のために

蓄えておくことも大事です。

地域住民と自治体職員双方が発想と行動を転換して、双方の関係性をよい方向へと変えていくことが、地方創生実現の鍵であることを強調して、講演を終わらせていただきます。

御清聴ありがとうございました。（拍手）

鼎談（要約）

○富野氏　　この鼎談は、行政の酒井市長、研究者の嶋田先生と私とで様々な論点を出させていただき、基調講演の内容について理解を深めていただくものです。最初に、酒井市長に、講演を踏まえて、今、篠山市で進められていることをお話ししていただきたいと思います。

○酒井氏　　今年から、「わが家・わが村のふるさと篠山に住もう帰ろう運動」を始めました。しかし、この運動は市全体で考えてしまうと、他人ごとになってしまうので、自分の村、自分の家という身近なところから考えるという取り組みです。これによって、先ほどの嶋田先生のお話にありました１％理論以上の、さらに大きな効果が期待できるのではないかと思っています。篠山市は日本遺産のまちになりましたし、今年は全国１０都市だけの景観のモデル都市にも選ばれました。何のためにこのようなことをしているかというと、みんなが自分のまち、故郷に誇りを持ち、再認識をしてもらうためです。「こんな田舎で暮らしていても、パッとしないから、勉強して外へ出なさい」と田舎で暮らしていると子どもが親から言われる時代になっており、篠山市でも同じような教育、考え方を長い間してきたのではないかと思います。私は地域や村のいいとこをみんなで見詰め直していただけたらありがたいと思います。

「わが家・わが村のふるさと篠山に住もう帰ろう運動」では、それぞれの地域に担当職員が入って行って、一緒に考えることにしています。嶋田先生の本に、「公務員ほどよい仕事はない。人や地域のために仕事ができる」とあります。行政職員の皆さんは、嶋田先生のお話を肝に銘じて、夢と誇りを持って地域のために頑張ってほしいと思います。

○富野氏　　ありがとうございました。本学でもご協力できればありがたいと思います。嶋田先生の基調講演を踏まえて、私からもお話しさせていただきます。私は経歴が幾つかありまして、最初は大学の博士課程で天文学を研究していましたが、会社を経営していた父が亡くなり、跡を継ぎベンチャー企業を立ち上げて社長を１２年間やりました。次に逗子市長を３期８年務めた後、市民自治や地域の活性化の研究に取り組みたく現職に就きました。私の立場から嶋田先生のお話を聞いて、先生は私たちが住み続けていける地域をどうつくったらいいかを非常にコンパクトにまとめておられると思いました。住み続けるためには、三つ大事なことがあります。一つは環境です。自然環境だけではなくて、社会の環境も含みます。二つ目は、生活する場としての経済、働く場、そして収入です。三つ目が、社会的な健全性です。この三つの要素があって初めて地域が頑張れます。そして、魅力がある地域となり、他の地域の人を呼び込めること

になります。地方で1番問題になるのは経済だと言われています。一つのとこに就職してご飯を食べていくのは今の世の中非常に難しいです。都会でも難しい。だから、先ほどのお話にあった幾つかの仕事を組み合わせていくなどすれば、多くの人がこの地域に住めることになります。そういうことにチャレンジしてみようという人がいるんですから、そういう人たちをしっかりつかまえて、その地域で生活してもらうようにしていくことで地域経済が循環する可能性は高いと私は思います。そういう意味では篠山市は非常に恵まれている地域で、篠山・丹波の名前は全国的にブランド力がありますね。資源の豊かさ、結束力の高さ、行政と地域が協力していくことなことを様々に組み合わせて、色々な方々に定住してもらう。あるいは、出ていった人たちがもう一度戻ってくるというような循環をつくっていくことは必ずできるはずだと思っております。私は民間企業での経験もありますし、行政も経験しました。嶋田先生のおっしゃったことは実は行政だけに関する話ではありません。地域だけの話でもありません。「私がこれをやって、息子や娘たちと一緒にこの地域で住み続けていきたい」という思いがあると、どんな組織でも地域でも、元気になっていきます。

地元に帰りたいという学生が最近、結構多いのですが、両親から「こんなところに帰ってきても苦労するばかりだから、都会で就職すればいいじゃないか」と言われて帰らないという学生が非常に多いです。それは情けないことで、自分がこれだったらやっていけるということ

を探し出して、みんなで協力する。実は篠山市にはそれらを実現できる条件があります。人口が減りながらもみんなが助け合って頑張れる地域になっていく。そういうことは十分可能だということを先生のお話から感じましたので、本学もそういうことに御協力できればありがたいと思っております。

嶋田先生、これまでの話をまとめていただければと思います。

○嶋田氏　　島根県海士町の隠岐島前高校では、卒業生を送り出すときに、「故郷」という歌の歌詞「志を果たしていつの日にか帰らん」をもじって、「志を果たし“に”いつの日にか帰らん」とみんなで歌うんです。同校では、今、「仕事のない島に、仕事がつくれる人材」を育成する教育をしています。日本全国、あるいは世界とつながって仕事ができるようになってほしい。そのためには、東京でも海外ででも就職していい。それで力つけ、志を果たす上で必要なネットワークを構築した上で、いつの日か帰ってきてほしいというわけです。

同町ではＩターンも増えています。海士町は島根県でも過疎が一番進んでいる地域ですが、早くに危機的な状況に直面したからこそ色々な新しい取り組みをしてきました。今では、島をどうにかしたいと一流企業を辞めてやってくる人も少なくありません。“ここに来たら一緒に夢が見られるかもしれない”“応援してくれる地域の人たちもいる”“こんなことは都会では経験できない”。そういう思いでＩターンの人が増えてます。そうすると、Ｉターンの活動に触発されてＵターンも増えてくるといういい循環が生まれています。

そういう意味で言うと、篠山市も頑張っておりますが、次に求められることは、夢というんでしょうか、ここに来たらおもしろいことができるんじゃないかという形で、Ｉターン者を引きつけ、Ｕターン者も引っ張られて帰ってくるような状況をつくり出していくことと思います。成功事例が出てきますと、夢を実現しに篠山に、という流れができ上がってくるんじゃないかというふうに期待しています。

○富野氏　　ありがとうございました。次は、このような試みを進めていくにはどういう課題があるのかということについて、酒井市長、お願いできますか。

○酒井氏　　篠山市の人口は、全体としては減っていますし、社会的増減は歯止めがかかりつつも減少傾向になっています。篠山に魅力を感じて篠山で頑張ろうという人が増えてきていることは間違いなと思います。ここで生まれ育ったものよりも、都会で生まれ育った人のほうが、篠山市に魅力を感じられておられると思います。神戸大学の連携もそうですし、地域おこし協力隊もそうです。地域のことを勉強して将来、ビジネスにつなげようというイノベーションラボとい

うのが去年できまして、先週１期生の修了式があったんですが、農村こそ創造的な仕事ができるという発想で取り組む若い方がふえてくると、地域のものの考え方が変わって来ると思います。篠山は農村といっても恵まれているので、一番良いところにできるのではないかと私は期待しています。

○富野氏　　ありがとうございました。嶋田先生がお気づきの篠山市の課題や大事な点がありましたら、専門家の立場から御指摘いただきたいと思います。

○嶋田氏　　移住・定住に一生懸命頑張っていらっしゃって、なかなか成果が出てこないというのは、全国の自治体と同じようにしているからだと思います。じゃあどうするのか、一つは、通常の移住・定住ではない何らの魅力をつくらないといけない。海士町は個性的な教育の場をつくったことによって、移住・定住が増えました。

もう一つ例を挙げると、私の教え子が鹿児島にいますが、彼はシンクタンクをつくって移住ドラフトという仕組みをつくりました。野球のドラフト会議と同じ仕組みです。自己資金で来てください。その代わり地域は、必ずこの人を全面的にバックアップしますよという条件をつけて、それを守れるところが手を挙げます。その際、地域の課題等も明示しておく。すると都会の移住希望者は、それを見て、これなら貢献できるかもしれないと手を挙げてくる。そして各地域が指名するわけです。

申しげたいのは、課題が明確になれば、それをどうにかしたいという人たちが結構出てきているということです。そういった方々と結びつき合いながら、地域の個性を磨いていって、そこでなければ得られないような体験なり、教育といったことがあれば集まってくるのかなと。そこができないからこそ差異化が図れない。簡単には結果が出ないということになっているという気がします。

○富野氏　　ありがとうございました。私からも申し上げたいのですが、移住･定住のことで、仕事の場がない、働く場がないということは、そろそろやめた方がいいのではないかと思っています。駐車場がないから商店街に人が集まらないんだという話がありました。でも、今の状態は本当にそうなのでしょうか。商店街自体に魅力がないんですね。駐車場の問題が実は本質的な問題ではないこともあるわけです。移住・定住の問題は職業がないから食べていけないかという考え方なんです。工夫をしないから、今、そういうふうに見えているだけで、本当はそういうことじゃなくて、ここで輝けるよ、いい人生を送れるよということをしっかりと、形として見ていただくようなやり方がすごく大事じゃないかと思います。

そういう点からいうと、京都府内の綾部市がダントツ移住者が多いんです。綾部市の移住者は自分たちはこういういい状態で生きていると発信します。その一人一人の情報が全国に伝わっていって、また移住者が出てくる循環ができているわけです。そういう意味では、移住してきた人たちがどういう生活をしているか、地域の魅力を自分のものとして生活できているかというところがすごく大事かと思います。篠山市にもそういう人が多いと思います。そういう人たちが持っている情報を、どうしたらうまく魅力あるものとして発信できるのかも一つ課題になるのかと思います。

また、移住・定住だけが問題ではなく、篠山市は多くの人が来ます。経済の面からいうとその交流人口をいかにうまく活用するかということも一つ課題かもしれません。

アンケート集計結果

【アンケート実施概要】

参加者数	189人		
回答者数	73人		
性別	男性：53人	女性：18人	回答なし・不明：2人
回収率	39％		

【Q1】「『地方創生』時代の地域住民と自治体職員～」について

大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった
30人	31人	10人	1人	0人

※回答なし・不明：1人

■感想

・他の自治体の成功例をなどを学ぶことができた。
・市の中からだけの視点では見えにくい部分について知ることができた。
・自治体職員や地域住民に求められる発想や行動をわかりやすく講演いただいた。
・豊富なデータと本人の人柄、熱意による講演に同感する点が多かった。
・内容は非常に面白かった。実践的な部分が多かったのが良い。少し早口で聞き取りにくかった。
・島根県の事例などの紹介もあり、希望を持って取り組むべき視点が整理できた。

【Q2】「開学記念鼎談」について

大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった
22人	25人	22人	1人	0人

※回答なし・不明：3人

■感想

・他の自治体の成功例をなどを学ぶことができた。
・市の中からだけの視点では見えにくい部分について知ることができた。
・自治体職員や地域住民に求められる発想や行動をわかりやすく講演いただいた。
・豊富なデータと本人の人柄、熱意による講演に同感する点が多かった。
・内容は非常に面白かった。実践的な部分が多かったのが良い。少し早口で聞きにくかった。
・島根県の事例などの紹介もあり、希望を持って取り組むべき視点が整理できた。

【Q３】「福知山公立大学に期待すること」について

・地域学連携を進めてほしい。
・兵庫の但馬丹波との連携もいただきたい。
・地域活性に向けた情報をどんどん発信して頂きたい。
・府県を越えたこういった内容の催しを今後も期待する。
・最高学府として地域のレベルアップに寄与してほしい。
・今回のような公開講座やワークショップ、フィールドワークなど期待している。
・地域創生を志す学生グループの養成に期待している。
・地域経営に特化した北近畿唯一の大学という特殊性に期待をしている。
北近畿の地域で多くのイベントを開催してほしい。

【Q４】その他、ご意見やご感想等あれば

・市の運動に役立つ講演だった。
・神戸大との連携で地域の課題に取組んでほしい。
・10年先ほんとうに深刻な事態（村消滅）が起きる可能性大であり早急な対策が必要である。

【Q５－１】性別は？

男性：53人	女性：18人

※回答なし・不明：2人

【Q５－２】年齢は？

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代以上
0人	10人	10人	20人	13人	13人	6人	0人	0人

※回答なし・不明：1人

【Q５－３】お住まいは？

市内：56人	市外：9人

※回答なし・不明：8人

【Ｑ６】この講演会は何でお知りになりましたか？（複数回答あり）

ちらし	ホームページ	新聞	知人から	その他
14人	0人	2人	2人	47人

※回答なし・不明：8人

■その他具体的に

・市役所　・市からの案内状　・職場　・案内のＤＭ

【Ｑ７】講演会を受講する際に参加しやすい時間帯はありますか？（複数回答あり）

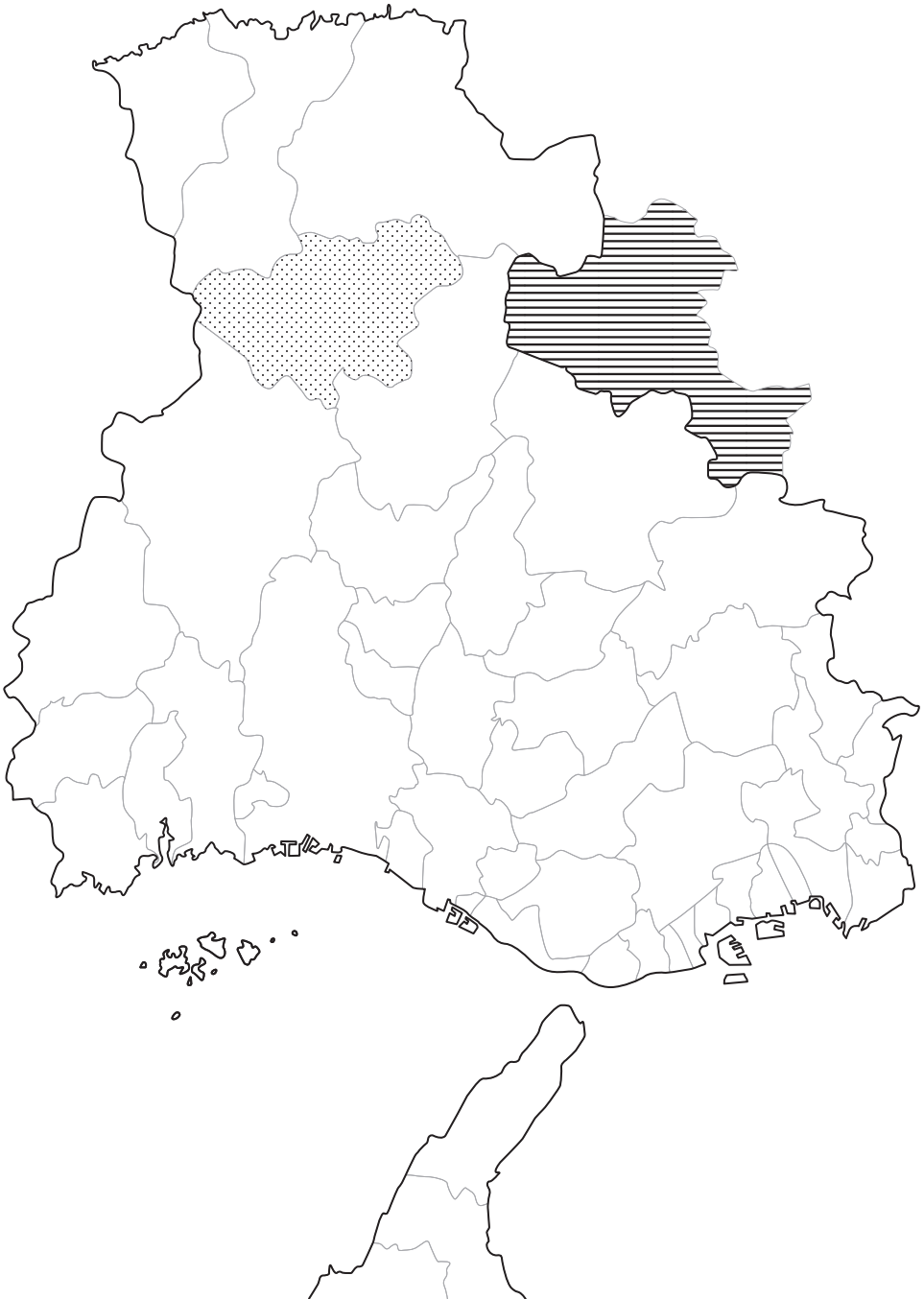
平日午前	平日午後	平日夜間	土日午前	土日午後	土日夜間	その他
6人	20人	16人	9人	15人	7人	0人

※回答なし・不明：15人

開学記念連続講演会（養父市）

持続可能な交流型ツーリズム

来訪者と受入地域の共生を目指して



2

福知山公立大学
開学記念連続講演会
第2回 養父市

シンポジウム 持続可能な交流型ツーリズム

来訪者と受入地域の共生を目指して

2017
10/21(土)

14:30～17:00
養父市立おおやホール
入場無料 ※定員150名 申込不要

基調講演

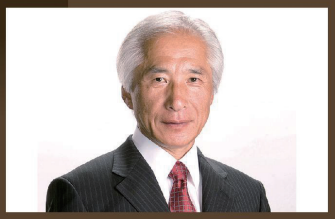
講師：出尾（でお） 宏二（こうじ） 氏
一般社団法人 そらの郷 事務局次長
にし阿波観光圏 観光地域づくりマネージャー

1959年、徳島県小松島市生まれ。国鉄四国総局入社後、徳島県内の駅に勤務。民営化後、JR四国で旅行業務等に関わる。1995年、全日空へ出向し、東京支店国内販売部に勤務。1997年、JR四国に復職し営業企画室に勤務、旅行業事業部や営業部での観光開発担当を経て、一般社団法人 そらの郷へ出向。2014年、観光地域づくりマネージャー（にし阿波観光圏）就任。

Deo Koji

対談

出尾 宏二 氏
×
養父市長 広瀬 栄 氏



1947年、兵庫県養父市生まれ。鳥取大学農学部卒業後、建設会社を経て八鹿町役場に入庁。合併後、助役、副市長を務める。2008年より養父市長（現在3期目）。

コーディネーター

福知山公立大学教授
中尾 誠二 氏

1969年、東京都足立区生まれ。筑波大学環境科学研究科修了後、農林水産省の財団職員を経て、2016年より現職。博士（農学）東京農工大学。専門は社会経済農学（都市農村交流）。

兵庫県養父市大屋町山路7 P有

会場 MAP 養父市立おおやホール

福知山公立大学
The University of Fukuchiyama

お問い合わせ 北近畿地域連携センター Kita-re
0773-24-7151
〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
FAX ／ 0773-24-7152
Mail ／ kita-re@fukuchiyama.ac.jp

●共催　福知山公立大学・養父市

講演（要約）

○出尾氏　　皆さんこんにちは。四国の西阿波、徳島県西部の山ばかりの地域から参りました出尾宏二と申します。私は、官民でつくりました一般社団法人「そらの郷」という組織で、観光地域づくりマネジャーとして、農業を軸にした地域づくりに取り組んでいます。これからお話しするのは小さな成功事例にすぎませんが、皆さんに何がしかのヒントになればと思います。

私たちの地域はおじいちゃん、おばあちゃんばかり、人口減少で集落が消えかけています。そこをどう維持していくかということで気づいたのが交流です。観光でやってくる訪問者と地域の人との持続的な交流によって小さな地域の社会システムを維持していこうというわけです。私たちの組織は２市２町の４つの自治体と県の５者が連携しています。これまで観光といえば、ホテルや交通事業者など限られた事業者だけが関わっていましたが、私たちは地域住民や農家の方、観光事業者も含めて地区ぐるみで観光客の誘致、地域づくりをやっています。

西阿波は国が認定した１３カ所の観光圏の一つで、徳島県の西半分ですので「西阿波～剣山・吉野川観光圏」という名前です。２年前には９万人だった人口が、今、約８万７，０００人で急速な人口減が進んでいる中山間地域です。「そらの郷」は、日本版DMO（Destination Management Organization）候補法人で、観光によるこの地域の経営のかじ取り役です。地域連携で色々な人を巻き込んでいくためには、行政の人から住んでいるおじいちゃんもおばあちゃんも理念を共有することが大事です。「持続可能な地域づくり」という理念のもと、観光を初め農水省から指定された「食と農の景勝地」の事業や「日本農業遺産」となった価値も使って取り組んでいますが、観光地になろうとは一切思っていません。ですから、ゆるキャラもつくりませんし、農家のおじいちゃん、おばちゃんに、殊さら「来訪者をおもてなししてあげて」とは一切言いません。人目を引くために山の中に変なオブジェを置くようなこともしません。

私たちが見てもらいたいのは風景ではなくて、人の暮らしによって育まれる情景です。私たちが提供しているのは場所と時間です。例えば、農家の軒先で地元の人とともに餅つきをしてもらったり、外国の観光客に古民家の囲炉を囲んで英語の俳句づくりのひとときを楽しんでいただいたりといった試みです。人が住み、生活している場そのものを見て、触れてもらうことです。これが、今一番外国人に感動してもらえ、共感してもらえることです。こういうことができるのは、地元の人たちの協力があればこそです。

西阿波は秘境と呼ばれ、畑も急な傾斜地にありますが、そこには１０００年以上も続けてきた独自

な伝統農法があります。これも貴重な観光資源です。夏の間に刈ったカヤを干し、春、作物を植えつける前に干したカヤを畑の上に布団のように敷き詰めます。そうすると畑の土の中にバクテリアなどの微生物がたくさんできます。そこへ作物を植えると、バクテリアに感染して免疫力を高めるので農薬は不要。また、このカヤは腐葉土となり肥料としても使えるので化学肥料も要らない。使い終わったら、土に戻ります。小さな山の中で植物資源が完全に循環をし、地球環境負荷がゼロです。これには、外国人も目を見張ります。カヤをツリー状にして干すのをコエグロといいます。大学生たちがやってきて農家の人の手ほどきでつくることもありますが、植物資源を使った循環農法に共感して皆楽しそうにつくっています。

西阿波には、岩陰遺跡とか地鎮塚など今でも信仰の対象になっているものが数多く存在しますが、これも外国人が非常に喜びます。日本はハイテクで効率のよい国だと思ってやってきたら、神頼みの農業があり、神様とともに暮らすライフスタイルが残っていることにとても感動するのです。

西阿波はかつて２８種もの雑穀をつくっていました。そこで、若い人に頼んで雑穀でクッキーをつくってもらいました。フランス人はそばが好物ですので、そばをガレットと言いかえますとパクパク食べてくれます。雑穀もミレットと言いかえれば、高付加価値の作物になるのです。

西阿波には縄文時代からの歴史があり、秘境の山奥に実に理にかなった自然循環型の暮らし方がある。それを見つけてくださいということで、「千年のかくれんぼ」というキャッチフレーズをつくり、

地域の伝統文化を世界に向けて売り込むために、来訪者のフランス人の若いカップルを主役にし、「桃源郷」と題したプロモーションビデオをつくりました。山奥の集落を訪れたカップルが自然の中で、人々と出会い、伝統文化や土地に根差した暮らし方に触れて共感する様を映像と音楽だけで紹介するもので、いわば「共感しにおいでよ」という誘いです。それが功を奏して外国人の訪問者は、１０年間で２３倍に増え、今は外国人だけで5万人の宿泊者がおります。

私たちは、伝統文化や暮らしに共感していただくことでお金を払っていただく「感動共感産業」をつくり、集落を何とか支えたいと思っています。

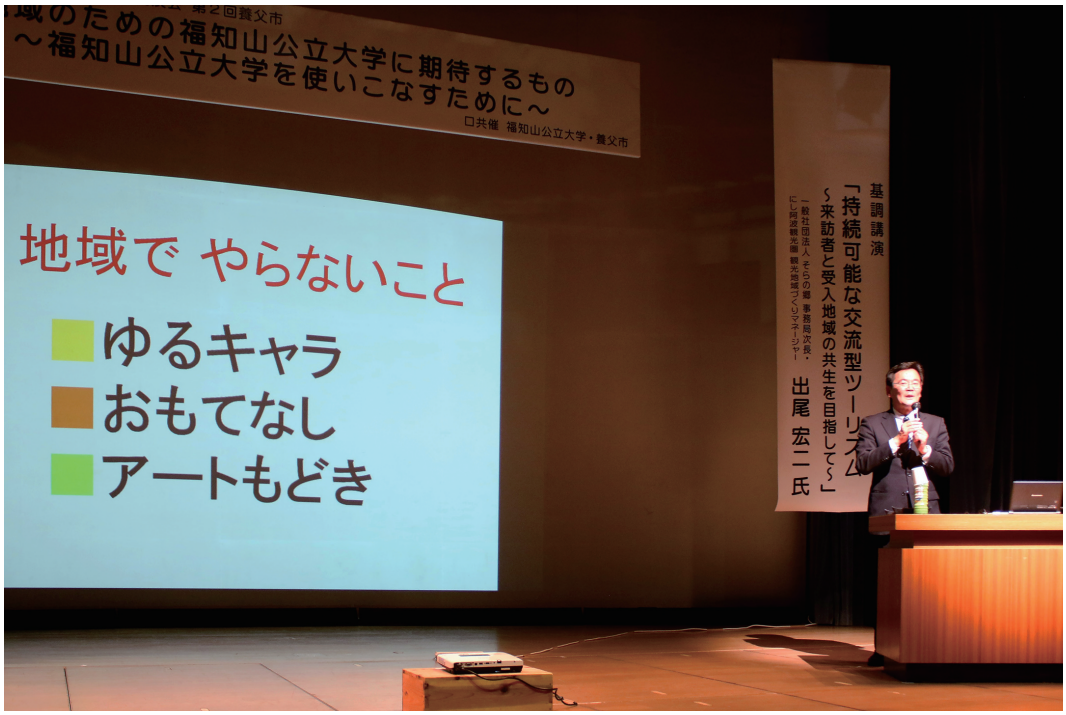
冒頭に連携が大事だと言いましたが、中高生も一役買っています。例えば、高校生が散策中の観光客とゲームをして、正解者にバッジをあげたり、放課後、中学生がホテルのフロントに出かけて外国人客と英会話をしたりしています。小中高では国際交流や文化交流の大切さを教える教育をしており、私も出前授業に出向いて、「君たちはいながらにして国際交流ができる素晴らしいところに住んでいるんだよ」と熱く語りかけます。すると、嬉しいことに観光で働いてみたいという生徒が出てくるようになりました。子供たちに自分の地域の魅力をちゃんと伝えれば、流出は多少なりとも防ぐことができるのではないでしょうか。

もっと広い連携の取り組みとして、Undiscovered Japanと銘打ち、全国１３カ所の観光圏が手を携えて、日本を世界に売り込む試みをしています。いずれの観光圏も観光のゴールデンルートから外れていますが、探検できる地域、日本の精神文化が色濃く残っている地域、そして西阿波のように古い農業文化が残っている地域など、地域の特色をアピールすれば、外国人は北海道から沖縄にでも気軽に移動してくれます。

今、年間４，０００人の修学旅行生の農家民泊がありますが、これを専門学校生や大学生、企業の人たち、さらには、東南アジアやＥＵ諸国の農業インターンなどへと広げたいと考えています。「食と農の景勝地」には、スキー場の上級コースと同様、傾斜角度が４２度もあるそば畑がありますが、外国の人たちは、そんな急峻な場所で畑仕事を体験するのはスリルがあって素晴らしいといい、ガイド料、体験料を払ってくれる。これまで細々とした自給自足以外考えられなかった畑でも農業外の収益を上げることがでる。畑は単に農作物をつくるだけではなくて、人を感動させ、人そのものを育てているフィールドでもあります。そういう視点から、「農業を考え直しましょう、観光の概念も変えましょう」と訴えて交流ビジネスを進めています。農家に来てもらって、お母さんの昔ながらの田舎料理を食べてもらうといったことでも、フランス人は「ブラボー」といって、お金を払ってくれます。これは生き方、暮らし方に共感をしてくれることが前提で成り立ちます。学生たちがやってきてコエグロをつくるとおじ

いちゃん、おばあちゃんが涙を出して喜んでくれる。学生たちは、伝統農法を守ることに役立っているという達成感がある。外国人や学生たちを見ていると、彼らはおもてなしを受けにきているのではないことがよくわかります。彼らが求めているものは、触れ合いです。地域の人たちの話を聞いて生き方に共感をして、まちの価値と違う価値があることに気づきます。

外国人のツアーを受けて4年になります。最初のうち、農家のお母さんたちは30メートルぐらい離れて「こんにちは」というんです。外国の人は、自分が無視されているように思いますが、今ではお母さんたちが自分から進んでハグをするようになりました。来訪者との触れ合いは、農家の人にとって生きがいになっているのです。



訪問者にとって山間地での農業体験は大変ですが、何回か来て共同作業をしてくださると、農業に少しでも役立ちたいという田舎ファンがふえてきます。ですから、交流人口を増やすことが、人口が減ってしまった集落の最低限のインフラを守ってあげる資源になると思っています。

しかし、西阿波の人口は、2040年には、半分になってしまいます。今、交流コンテンツをつくってくださっているおじいちゃん、おばあちゃんは20年は持たないです。そのとき、集落を誰が支えるのか。目をつけたのが外国人の来訪者です。東南アジアなどから日本の農業を学びに来る人たちも増えています。他の観光地との差別化を図って、来訪者を増やし、集落の維持を助けてもらう戦略を立てています。そうした取り組みで目指すのは、「住んでよし、訪れてよし」の地域づくりです。訪れる人

に、「ここに住んでよかったね」と思ってもらえることこそが、観光の目的でなくてはならないと思っております。そのために色々な事業者さんにも連携していただき、例えば、今年初めて日本でラフティングの世界大会を吉野川でやらせてもらい、２２カ国の参加がありました。若い人の中には、来訪者を農家に案内してガイド料を稼ぐ会社をつくり、ボランティアではなくてちゃんと報酬を得て、農業文化を伝えるネイチャーガイドを目指す人もいます。

人が住んでいるところで、交流を前提にして、自然環境の中で農業文化を感じてもらう農泊を増やしたいと、私たちは思っています。また、SAKURA Qualityという名称で全国１３の観光圏が同じ基準で、部屋数やサービス、体験の内容など観光の品質を見える化する観光品質認証制度を早くつくりたいと思っています。

色々と申しましたが、要は、来訪者と地域の人が一緒になって社会参加型の交流をちゃんとつくっていって、消滅集落になるのを防ぐべく頑張ろうと思っています。

ぜひ、皆様も一度、外国人が桃源郷と呼ぶ、西阿波へお越しいただくことをお待ちしています。

どうも御清聴ありがとうございました。

対談（要約）

○中尾氏　　コーディネーターを務めます中尾です。私はグリーンツーリズムを研究しております。今年の４月から総務省が関係人口ということを言い始めました。

頻繁に地域を訪れるリピーターや協力隊員、それに地元出身者も含め地域と継続的な関係がある人たちのことで、短期的な交流人口と長期的な定住人口の中間的な言葉ですが、これからどんどん使われるようになると思います。先ほどの講演の中で触れ合いという言葉が出てきましたが、地元の人と来る人双方が幸せになる関係をどう構築するかが大切かと思います。

　では、市長さん、講演の感想を含めてお話しください。

○広瀬氏　　私も人口減少が進む中で、市長としてまちづくりに取り組んでおりますが、出尾さんのお話を聞いて、「すごいな、我々よりもっと悪い条件の中で、ずっと先を進まれている」と思いました。同時に養父市でも、やればもっとできるのではないかと勇気をいただきました。我々が今やっていることが間違いではないことも確信できました。長年にわたって生じた人口減少に歯どめをかけるのは大変なことですが、それをやっていただけるのは、市の職員であり、市民の皆さんであることを自覚していただくことが必要ではないかという思いで聞かせていただきました。

　今日、福知山公立大学にこのような場を設けていただきまして厚くお礼を申し上げます。養父市

と大学の連携は前身の成美大学のころから続いております。養父市は昨年から国に先駆けまして、市独自の大学生の奨学資金をつくりました。これは、将来養父市に帰ってきていただくことが条件の給付型の奨学資金ですが、学生の審査委員長を井口学長にしていただくなど、養父市のまちづくりに深くかかわっていただいています。養父市では、若者は１８歳になると、ほとんどが都市に出ていきますが、今、但馬３市２町では、豊岡市を中心に定住自立圏構想を組んでおり、豊岡市に観光・もてなしとアートを中心とした専門職大学をつくろうとしております。いい大学をつくれば地元だけでなく外から若い人が来てくれるだろうという思いからですが、それ以前に身近な生活圏の福知山市に公立大学があるのは、とても心強いことであり今度もしっかりと連携を進めさせていただきたいと思っています。

養父市は、出尾先生の地域から見ますと、大分おくれておりますが、観光を中心にした地方創生に取り組んでいます。養父市は、旧４町が一つになって市になりました。町それぞれに個性がありますが、中でも大屋は鉱山があって早くから外の新しい文化が入ってきた反面、奥まった地域にあって、ある意味、封建的なところもありますが、新しいものと古きよきものが共存しているユニークな町です。最近、明延鉱山と中瀬の鉱山が鉱山遺跡指定されました。また、姫路から養父市の中瀬まで鉱石の道ということで日本遺産にも認定されました。鉱山遺跡の日本遺産は日本で初めてであります。

大屋の蔵垣地区は日本の近代養蚕の発祥の地と言われ、３階建ての土壁の養蚕農家がありますが、この春、景観が素晴らしいということで、重要伝統的建造物群保存地区に指定されました。その養蚕農家を旅館業法の特例を使いまして宿泊施設に改築して、今、活用しています。そのほか大屋地区には、樽見の大桜や日本で最も南の西にあるミズバショウの自生地や天滝など素晴らしい自然、古い伝統芸能や祭りもあり、ＢＩＧＬＡＢＯというアート村では多くの芸術家が活動をしています。

出尾先生の話にありましたＤＭＯの取り組みを、今年度から大屋地区でやることにしました。養父市は３年前、農業を中心とした国家戦略特区の地区指定を受けておりますので、農業をベースにした新しい観光の形態をつくり出すべく、まず大屋で様々な課題解決に取り組んで、上手くいけばそれを、市全域に拡大していきたいと考えております。

○中尾氏　　ありがとうございました。出尾様お願いいします。

○出尾氏　　まず、西阿波はインバウンドを目指していると誤解されないように、言っておきたいのですが、私たちは国内の交流人口を増やすためにインバウンドをやっているんです。西阿波に

来る欧米人の中では、フランス人が一番多く、彼らは「おじいちゃん、おばあちゃんが、こんなに幸せそうな顔をしてくれるんだったら、自分たちはここに旅行に来た価値がある」といってくださる。だから、フランスの人から招き入れているんです。皆さんはフランスの人が行く田舎だったらきっとお洒落でいいところだろうと思うでしょう。外国人に続いてやがて日本人も来るぞというリバウンド効果を狙っているわけです。田舎料理を食べていただいた後で、民謡を歌ってあげると、フランス人は素晴らしいといってくださる。そう言われると、農家の人たちも楽しくなる。これこそ、地域づくりで一番大事なことだと思います。そんなことで考えると、市長の特区の戦略は非常に共感するところがあります。私たちは農業の概念をもう少し変えるべきだと思います。日本の政治、体制は、今、ＧＤＰ、国民総生産を高めて経済再生するんだと一生懸命言ってるんですが、もう1社トヨタみたいな自動車産業が日本の中でできるかというと、もう無理でしょう。電子産業にしても人件費が高過ぎて中国、台湾にかなわない。今から日本として取り得る経済再生の道は、工業立国じゃないはずなんです。では、何を売るかというと、付加価値です。例えば、シンガポールは観光で収入を得る一方、最先端の医療を提供して、中国本土から来る人たちを病院に一週間、１カ月滞在させて、お金を稼いでいる。じゃあ、日本で売る付加価値は何か。それは農山村で生み出せるんです。世界から人を招き、交流してもらってお金をいただく。つまり農業を産業として見直すということです。畑は作物だけでなく人そのものもつくっている。大根に名前をつけるブランディング６次産業もあるけれども、畑を歩いただけで、ちゃんとお金が落ちるという産業としての可能性が秘められています。これからは、農山村が付加価値を生むフィールドとしてますます注目されると思います。徳島県だから兵庫県だからなど言わないで、そういう明るい農村を目指して頑張りたいと思います。

○中尾氏　　ありがとうございました。会場の方で質問がありましたらどうぞ。

○聴衆　　養父市内在住のシルバー世代です。出尾先生に２点お伺いします。農家の参加者は何割でしょうか。それから、地元の意識改革をされたのは先生お一人でしょうか。

○出尾氏　　一番多く関わって下っている農家は教育旅行民泊で、今、１７０軒参加をしてもらっています。１割ぐらいの方が何らかの形で観光に関わってくださっています。ただ、非常に閉鎖的な面も残っていて、「外から人が来なくていい」という方もいますが、外国人を集落で迎え入れてもらう際、とっておきの手として、地元の高校生を伴って頼みにいきます。すると、おじいちゃん、おばあちゃんは「孫の頼みなら」と一切反対しないで、受け入れてくれます。

○中尾氏　　ありがとうございました。市長、今の議論を踏まえて何かございますか。

○広瀬氏　　農業の概念を変えるということは、私も全くそのとおりだと思っております。ものをつくって売れる時代ではないことも事実です。その中で何が大切かというと、我々の先人がずっと積み重ねてきた、それこそ体の中にしみついているソフトを再現して、それをみんなでもう一度体験する、そういうことが必要ではないか。そのことをやっていけたらと思っております。

○中尾氏　　ありがとうございます。出尾さん、言い残されたことがあればお話しください。

○出尾氏　　私たちのエリアでは教育旅行民泊が一番多い。山地ですから危険な場所も多く、そんなところで遊んでいるような子供がいると真剣に怒ります。すると子供たちは「初めて本気で怒られた」といって嬉しそうな顔をして帰ります。そういう場面を毎日目にします。また、外国人を迎え入れるに際しては、とりたてて外国語の勉強をすることもありません。言葉が通じなくても心は通じ合えるんです。そういう場面を毎回見ます。心と心が通えば、まだまだこの日本は素敵な国だと思います。農山村の魅力を世界に、そして日本の子供たちにまず教えてあげようと思っています。こういう活動を一緒に取り組ませていただければと思います。

今回、こんな機会を賜りまして、本当にありがとうございます。ぜひ、皆さん、西阿波へ一度お越しください。お待ちしています。

○中尾氏　　ありがとうございました。いろいろお話が出ましたが、インバウンドや教育民泊、それに地方に移住したい人の３つにターゲットを絞り込んでいけば田舎の観光はうまくいくのかな

と感じました。

それから覚えていただきたい言葉が二つあります。一つは最初に言いました関係人口、もう一つはコミュニケーション・ツーリズムです。交流観光を英語にしたものですが、これには世界の人々と心を通わせ、世界平和にも通じる響きがあるからです。

出尾さん、市長のお二人、会場の皆さん、大変ありがとうございました。

アンケート集計結果

【アンケート実施概要】

参加者数	８４人		
回答者数	４６人		
性別	男性：３２人	女性：１１人	回答なし・不明：３人
回収率	５５％		

【Q１】「持続可能な交流型ツーリズム～来訪者と受入地域の共生を目指して～」

大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった
28人	15人	1人	0人	0人

※回答なし・不明：2人

■感想

・地域に独自の資源を見つめなおすということを改めて考えさせられた。
・良く整理されて分かりやすい話でした
・観光地域づくりに結び付きそうにない教育も関連付け、戦力としている点が参考になった。。
・出尾先生の話はわかりやすく、聞きやすく大変よかったと思います
・あれこれ手をつけるのではなく、テーマを絞ってとりくんでおられることに共感しました。
・日本だけでなく世界に向けて発信していろいろな事を考えられていてすごいと思った。
・今までとちがう方向性をもった地域おこしの話に興味深く感じました
・地方から世界を見るという視点が大変すごい。
・地域づくり、農業の取り組みへの概念など新たな感覚を与えてもらった

【Q２】「開学記念シンポジウム」について

大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった
13人	18人	10人	1人	0人

※回答なし・不明：3人

■感想

・農業が成り立つように再考することが重要ではないかと考えました
・農業の価値を再確認することができた農業の将来に夢を感じた
・住んでいるところに愛着を持ち、持続可能な地域づくりをしていきたいと思いました。
・市長の話が長かった

・養父市の取組みがよくわかった内容であった。講義とつながりもあった。
・貴重な実践のポイントを聞くことができた。
・具体的な説明を出尾氏がされて、よく理解できた
・もっと対談時間があってもよかったのでは

【Q３】「福知山公立大学に期待すること」について

・これからも地域活性化の方策を探求する学問をすすめてください。
・地域との連携や地域とともに歩む、学ぶ大学になってほしいです。
・養父市から通学可能な公立大学としてさらに発展されたい
・地域に役立つ人材づくり、地域の元気を盛り上げる場づくり行政とともに歩むスタンスを持ち続けてほしい
・地元に近い大学として養父市と連携をお願いしたいです
・企業経営、田舎、田舎のすばらしさをPRするPRのしかたを示唆してほしい

【Q４】その他、ご意見やご感想等あれば

・交流や観光というものは相手に依存する、相手の価値観との接点が必要だという面についてもいろいろ考えるところがありました。
・福知山大学での学びはすごいものがあると感じました。
・まち協やまちづくりグループの方にも聞いていただきたい内容であった。
・養父市地方創生への新たな道しるべになったことと思います。
・思ったより人が少なかったが、良い内容だったのでより多くの人に聞いてほしかった

【Q５－１】性別は？

男性：32人	女性：11人

※回答なし・不明：2人

【Q５－２】年齢は？

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代以上
0人	7人	3人	5人	23人	3人	7人	0人	0人

※回答なし・不明：1人

【Q５－３】お住まいは？

市内：25人	市外：9人

※回答なし・不明：12人

【Q６】この講演会は何でお知りになりましたか？（複数回答あり）

ちらし	ホームページ	新聞	知人から	その他
21人	4人	1人	6人	11人

※回答なし・不明：7人

■その他具体的に

・職場　・学校　・中尾先生から

【Q７】講演会を受講する際に参加しやすい時間帯はありますか？（複数回答あり）

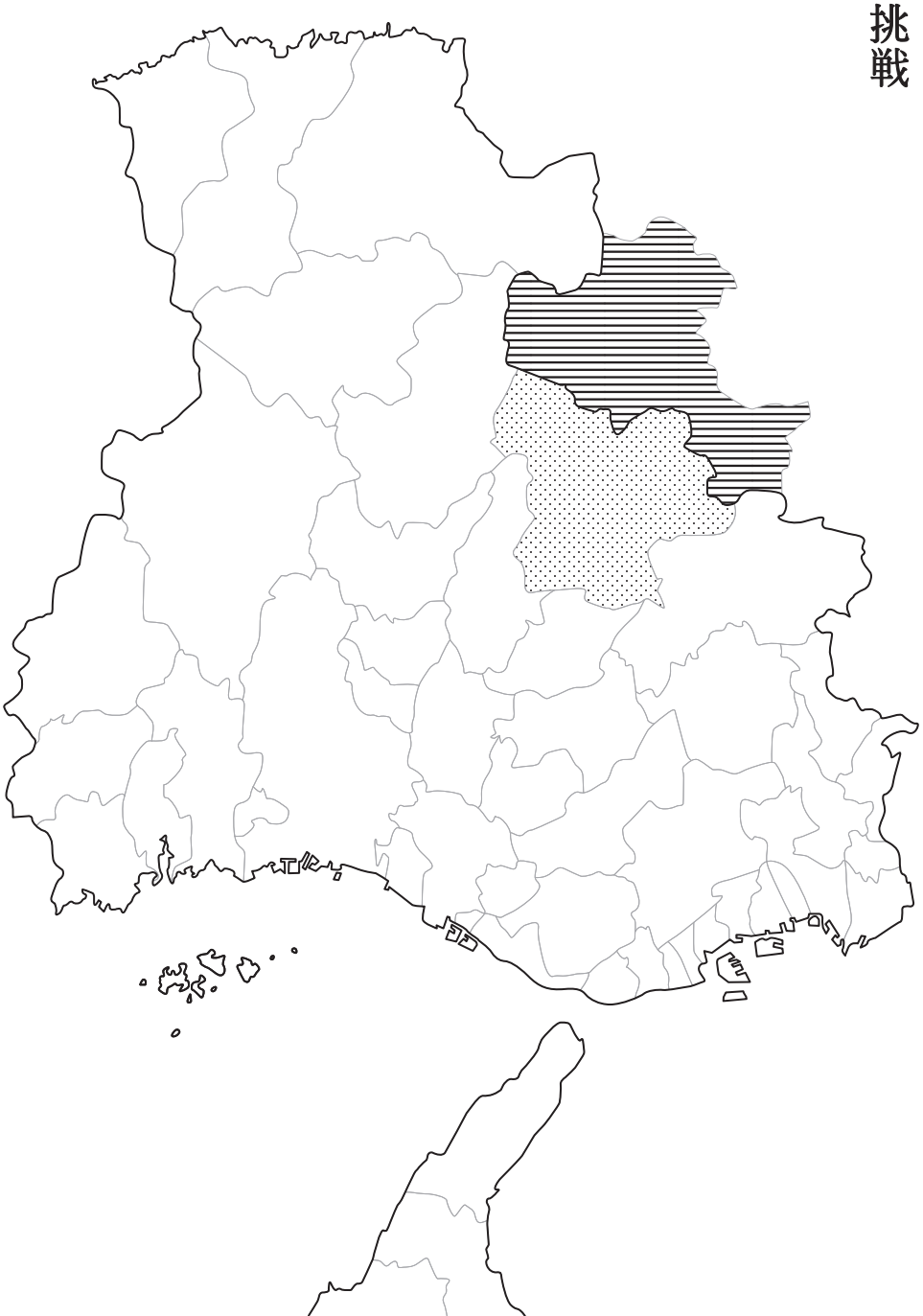
平日午前	平日午後	平日夜間	土日午前	土日午後	土日夜間	その他
0人	3人	6人	5人	26人	4人	0人

※回答なし・不明：7人

開学記念連続講演会（丹波市）

プレイス・ブランディングによる地方創生

丹波市における農のブランド化の挑戦



3

福知山公立大学
開学記念連続講演会
第3回 丹波市

シンポジウム
プレイス・ブランディングによる地方創生

丹波市における農のブランド化の挑戦

2017
11/12(日)

13:30～16:00
丹波市立山南住民センター やまなみホール
入場無料 ※定員336名 申込不要

基調講演

講師：徳山 美津恵（とくやま みつえ）氏　関西大学総合情報学部 教授

学習院大学大学院経営学研究科博士課程単位取得退学。名古屋市立大学大学院経済学研究科講師、同准教授、関西大学総合情報学部准教授を経て現職。名古屋都市センター企画委員（2011～2014年）、守山市戦略会議委員（2011年）を務め、現在、丹波市創生シティプロモーション戦略委員（2017～2020年予定）。専門は、マーケティング論、ブランド論。

Tokuyama Mitsue

パネリスト

講師 徳山 美津恵 氏

丹波市長 谷口 進一 氏

1953年、丹波市柏原町生まれ。神戸大学法学部卒業後、兵庫県庁に入庁。退職後、株式会社夢舞台・ウェスティンホテル淡路社長などを歴任。2016年12月より丹波市長。

丹波市役所産業経済部農業振興課長 余田 覚 氏

1962年丹波市生まれ。1981年、市島町役場入庁。2004年11月氷上郡6町合併により丹波市役所。2016年度より現職。

コーディネーター

福島 貞道 氏　福知山公立大学 教授

1947年生まれ。1971年京都市に奉職。建築指導部長、都市景観部長、景観創生監などを歴任。2008年3月退職。京都大学、武庫川女子大学、龍谷大学の非常勤講師を務め、現在に至る。

兵庫県丹波市山南町谷川1110 P有

会場 MAP　やまなみホール

お問い合わせ
北近畿地域連携センター Kita-re
0773-24-7151
〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
FAX ／ 0773-24-7152
Mail ／ kita-re@fukuchiyama.ac.jp

●共催　福知山公立大学・丹波市

福知山公立大学
The University of Fukuchiyama

講演（要約）

○徳山氏　　今日は、私の専門分野である経営学の視点から地域のブランディングによって丹波市の地方創生をどういうふうに考えていくべきかということをお話ししたいと思います。

ブランディングという言葉は、もともと企業のブランドの価値をどう上げるかということで、ビジネスの分野で使われていたものですが、これを多様な特徴や価値を持つ国や都市にも適応していこうというというのが「プレイス・ブランディング」です。地域のブランドには、産品（買いたい）や観光地（訪れたい）のほか「住みたいところ」がありますが、我が国の地域ブランディング論は産品と観光地にとどまっており、これだと単にモノのブランディングに限定されてしまいます。地方創生において重要なのは、「住みたいところ」ですので、あえて海外で広く使われるている「プレイス・ブランディング」という言葉を使いました。

まず最初に、先進事例として、世界的に注目されているアメリカのオレゴン州のポートランド市の事例を紹介したいと思います。同市は、米国北西部のシアトルの南にあり、人口は約６３万人の小さな都市です。かつてはstumptown（切り株のまち）と呼ばれ、荒廃した都市でしたが、今では週に４００人ペースで移住者がやってくるほど人気のある都市に様変わりしています。７０年代に州が都市境界線を設けて都市開発ができる地域を限定し、森林と農業を保護したことから、自然に配慮したコンパクトシティという点が評価され、「最も住んでみたい町」であるとか「環境に優しい都市」、「持続可能な都市」、「３５歳以下が最も暮らしやすい都市」などの名称で様々な賞を受けています。

移住してくる人たちの多くが、大学院卒など高学歴の若い人たちで、中には一流企業の職を捨ててやってくる人もいますが、彼らが口をそろえて言うのは、この都市の「生活の質の高さ」です。ここでは２０分圏内で、衣食住が完結できます。広大な車社会のアメリカでこうしたコンパクトなまちづくりのコンセプトは画期的です。１時間ほどで行ける近郊に農場があるので地産地消のレストランが非常に多く、全米でもグルメのまちとして評価されています。このほか、若者が起業してつくった、こだわりのコーヒーショップ、ポートランド・メイドの皮製品、木工品の店もたくさんあって海外にも流通しています。

私は、去年視察に行きましたが、至るところで若い人が働いていて、町がとても活き活きしているという印象を受けました。地産地消の意識が地域の人たちに根づいていて、レストランのオーナーシェフたちも、必ず地域内のファーマーズマーケットで地元の新鮮な有機栽培の野菜を仕入れます。そうしたオーガニックレストランが評判を呼び高い評価を得た結果、ヨーロッパからも観光客が来るよう

になっています。オーガニックレストランのパイオニアであるグレッグ・ヒギンズさんは、多くのレストランが全国規模のスーパーから食材を仕入れるようになり、安心して食べられる食材がアメリカでなくなっていくという危機感から店を出したと話してくれました。ポートランドを選んだのは、たまたま自転車旅行で訪れた際、自然の食材が手に入りやすいとわかったことと、土地の人たちの温かさや独立した気風に触れたからだということです。他にもＩＴ企業を辞めて安全な塩づくりをしている人や、地元の蜂蜜生産者と協力して販売所をつくるといった形で起業する若い人たちもいます。

こうした若い起業家を支えているのがオレゴン州とオレゴン州立大学がつくった「フードイノベーションセンター」という機関です。ここには、リサーチシェフというプロのシェフがいて、起業を目指す人のために商品開発のサポートをしています。もう一つ、ポートランド州立大学が、市の銀行のスポンサーを得て、起業家養成講座を開設しています。大学教員だけでなく法律家や銀行マンら実務家も指導陣に加わり、ビジネスづくりをサポートするもので、授業料は年間２６０ドル。3万円弱払えば起業の一歩が踏み出せるわけです。

ポートランドの例からわかるように地域づくりは、企業のようにトップダウンでいきなり何か大きいことをするといったものではありません。誰かの試みがじわじわと広がっていき、それが人を呼んで地域のイメージがつくられ、地域の価値が生まれてきます。

丹波市では、新規就農者の方が増えているということで、私は、この５月、農業振興課と新規就農

者の方、それから丹波市の産品を活用されている組織を調査しました。まず、３人のＩターンの方にインタビューさせていただきましたが、皆さん高学歴で、自然との共生を求めて農業に携わるという生き方を選ばれていて、ポートランドに集まる若い人たちと同じだなという印象を受けました。じゃあ、なぜ丹波かというと、人口６万の丹波市は、人と出会えて、つながりやすいということで、この土地を選ばれたということです。

それから、「ゆめの樹」さんは、丹波のブランド力を感じて、丹波の資産である栗など丹波三宝を発信する発信拠点となっていますが、単なる発信だけでなく、地域と観光客の人たちをつなげる交流拠点でもあって、ここを軸にブランド力を高めたいとおっしゃっていました。

同じように「中島大詳堂」さんもこの地のたくさんの資産を自分たちのブランディングに活かしていくと同時に丹波を発信していきたいということですが、この土地には強固なネットワーク、つながる力があると言われていました。

丹波市農業振興課でのヒアリングでも、丹波のブランドは非常に知名度と需要もあるということで、モノのブランド化を進めていらっしゃる。ただ、供給体制が整っていないという課題もあって、地域就農者支援のための農の学校の取り組みをしようとされている。儲けも重要ですが、楽しむというところもやっていかなければいけない。そういう形で農業人口を増やしていきたいとおっしゃっていました。

ヒアリング結果を踏まえて私なりの考えをまとめますと、丹波の最大の強みは、全国的な認知度の高さです。知名度がないとその先のイメージづくりが難しいですが、丹波の知名度は関東、東北まで及んでいます。

この地域の魅力だと感じたのが、自分たちの地域に誇りを持っている人たちがいることです。外から来た人も、例えば、「中島大詳堂」の会長さんが、この地を選んだのは里山の自然が美しいからだと言われています。新規就農者の方も景観が素晴らしいし、村の人たちもいい人ばかりだからここに住んで地域に関わっていきたいと言っています。丹波に意味を見出している人が少なからずいらっしゃるのが印象的でした。新規就農者の人がこの地を選んだ理由は、ブランド力と人がつながる力です。

地域創生には産品のブランド化ももちろん必要です。しかし、それ以上に場所、プレイスのブランド化を考えることがより重要ではないかと思います。私の調査結果を踏まえて、プレイス・ブランディングの課題を幾つか挙げてみますと、まず一つ目は、市全体という形で考えないこと。行政地区単位で考えると、総花的になりがちなので、可変性をもっていろいろ考えいくほうが、面白いことができるのではないかと思います。

二つ目は、関係者を管理するという考え方は禁物で、いろんな活動をつなげていくことが重要だと

思います。新規就農者の方も生産的なつながる場がないとおっしゃっていましたが、地域の人たちが自主的に交われる場所づくりや仕組みを考える必要があると思います。

プレイス・ブランディングでは、その地域ならではの体験ができることがとても重要ですが、丹波市の場合、交流人口をひっぱってくる上で農業が非常に重要ではないかと思います。ただ単に移住者の数を増やすのではなくて、移住の質を考えたいい施策を展開していくことが重要かと思っています。

最後に、後半の論議にもつながる私の考え方を挙げておきます。

1つは、丹波市が考える地域連携の可能性はどういうところにあるかということです。

2点目は、農業のブランド化が、この地域においては農業のコアになっていくのではないかというというところで、ポートランド的な食と農で若い人たちが集まるようなことができるのではないか。施策として農の学校は考えられないか。

3点目としては、農業で終わるのでなくて、例えば、ポートランドの例にあったような、こだわりのコーヒーショップなど、起業支援もできるのではないか。そういう可能性はないかといったことが話せたらいいかと思っております。

私の話は、以上でございます。

皆さん、どうもありがとうございました。

シンポジウム（要約）

○福島氏　　コーディネーターを務めます福島です。

前半の講演での御提言を受けまして、パネリストの皆様に御意見を賜りたいと思います。

まず、市長に丹波市の地域の経営方針等についてお話を伺いたいと思います。

○谷口氏　　徳山先生、貴重な講演をありがとうございました。ポートランドのオーガニックや起業する人のお話は、丹波市でも参考にできると思います。現在、市には１３の事業計画があります。そのほとんどは前任の市長が計画されたものですが、その一つに「農の学校」というのがあります。丹波市の主な産業は農業であり、有機農業の拡充にも挑戦するなど農業を中心にしたまちづくりを目指しておりますが、そういう意味からも、この「農の学校」には特に力を入れており、２０１９年の開校を目指して一生懸命取り組んでおります。

○福島氏　　ありがとうございました。

余田課長、市長のお話を踏まえまして、実務的な面から課題等についてお話しください。

○余田氏　　丹波市の有機農業は約４０年の歴史があり、関西の有機農業発祥の地としても有名です。長年にわたって培った有機農法の技術･技能、生産力などは他の地域よりは大きく進んでいると思いますが、生産量の拡大や農家の所得向上になかなかつながらない段階にとどまっております。こういう状況を打破するために、平成２９年度に「環境創造型農業推進懇話会」を設けました。その中で、生産者と消費者、技術者を結ぶ仕組みづくりや、就農や定住、流通、加工などについての提言を得て施策を進めていきたいと思っています。「農の学校」は、その施策を成功させるための一つの方策です。学校は、有機農業が始まった市島の地にあり、そこで1年間、有機農業や特産物の基礎知識を初め農業経営についても学んでいただき、卒業した人の就農や定住支援体制を市民の協力も得まして整えていきたいと考えています。

○福島氏　　ありがとうございました。

徳山先生には、既に課題の御提言もいただいていますが、今のお二人のお話を受けまして、御意見をお願いします。

○徳山氏　　丹波市の有機農業の長い歴史は、積極的に発信していくべきだと思います。その際、「丹波の有機農業」という形で丹波というよく知られているブランドに乗せて発信することが重要だと思います。また、「農の学校」は、就農にチャレンジする人を後押しする意味で非常にいい試みであり評価しています。欲を言えば、「ゆめの樹」さんや「中島大詳堂」さんのように、交流拠点のような役

割も担っていただければなおいいと思います。

○谷口氏　　交流でいいますと、近々、奈良県の宇陀市と姉妹提携を結ぶ予定にしております。宇陀市は推古天皇の時代から薬草を栽培しており今はオーガニック農業も頑張っていますが、定住人口が減っていく中で、こうした広域交流をすることで地域のにぎわいを維持していくことも考えております。

○福島氏　　ありがとうございました。

先ほど徳山先生から「丹波の有機農業」のブランドの発信というお話がありましたが、有機農業の他の地区との差別化をどのように図られるかについて、余田課長にお伺いします。

○余田氏　　現在、日本ではＪＡＳ規格による認証制度がありますが、丹波市としましては、丹波市仕立ての認証、つまり「この作物は丹波市ですよ。」という認証をつくりたいと考えております。全部の作物につけるのは難しいので、まずは、懇話会の中で有機農産物につけられないか検討をしています。生産者だけではなく、流通業者や加工業者、小売業者、市民などできるだけ多くの方に関わっていただいて、丹波の農産物を発信していきたいと思います。それには、まずは市民の皆さんが丹波の農産物のファンになっていただくことが大事だと思っておりますので、地産地消も推し進めていきたいと考えています。

○福島氏　　ありがとうございます。

丹波三宝など丹波の産品の全国的な需要について、徳山先生にお伺いしたいと思います。

○徳山氏　　需要ということで一例を挙げると、かつて広島県は「広島レモン」という名称で売ってきましたが、瀬戸内ブランドに着眼して、「瀬戸内レモン」と銘打って売ったら、メーカーなども関わって色々なレモンがらみの商品化が進みレモン自体の需要が伸びています。工夫次第で需要はつくり出せるものです。

○福島氏　　ありがとうございます。

外へのプロモーション体制について、谷口市長に伺いたいと思います。

○谷口市長　　まだまだＰＲ不足だと思います。去年、家内と大阪の法善寺横丁の夫婦ぜんざいという店で、ぜんざいを食べた際に、「ここの小豆はどこの小豆ですか」と聞くと、店主いわく「うちは丹波の春日町の小豆しか使わない。北海道産よりも値が５倍も高いけども、炊き上げたときの食感が全然違う。他の小豆は使う気がしない」と。この価値をもっと積極的にＰＲすべきだと思いました。当市では昨年から「ぜんざいフェア」を初めておりますが、９，５００食のうちの半分を、丹波市外の人が食べてくれました。ＰＲ次第では年々増えていくのではないかと思います。

○福島氏　　ありがとうございます。

余田課長、ＰＲに関して実務面でのお話を伺いたいと思います。

○余田覚氏　　「ぜんざいフェア」は、「丹波大納言小豆ブランド戦略会議」の提言で生まれたもので、丹波大納言小豆の需要喚起やブランド強化をねらった催しです。戦略会議は兵庫県や丹波市、ＪＡさん、生産者組織、観光協会、商工会の皆さんなど多くの人に携わっていただいてできた組織でございまして、「ぜんざいフェア」は今後も地道に続けていきたいと思っています。

○福島氏　　ありがとうございます。

「農の学校」のハードの部分をつくるためにはどれほどの負担があるのでしょうか。

○余田氏　　学校は既存の施設を改修して校舎として利用しますので、ハードには多くのお金を使いません。有機農業発祥の市島地区そのものをキャンパスとして地域の人たちとも触れ合いながら農を学んでいただきたいと思っています。

○福島氏　　ありがとうございます。

徳山先生、今のお話を受けましてコメントをお願いします。

○徳山氏　　ハードにお金を使わず、地域の人との交流を大事にするのはいい試みだと思います。先進地域の人たちに聞くと、意欲的な取り組みをしていると、申請しなくても国のほうからサポートをしてくれるそうです。その意味では、いい試みはまず実行ありきだと思います。

○福島氏　　ありがとうございます。

会場の方で、御質問等ありましたら、どうぞ。

○聴衆　　徳山先生にはＢＯＰ、起業家養成講座での農業のビジネス的な要素について、余田課長には、農の学校で教える経営についてお聞きしたいです。

○徳山氏　　起業家養成講座は、農業に限らず大小様々なビジネスプランを持った人たちを対象にしたものです。農業に関して関わりが深いのは、むしろ「フードイノベーションセンター」のほうで、例えば、ここのサポートを得て土地の生産物を商品化して付加価値をつけ、ショップを開く若い女性などもいます。

○余田氏　　「農の学校」で学ぼうという人には、農業をなりわいとしたい人から、農業をしながらあと半分は自分のライフラインを築きたい人など色々あると思いますが、私たちが考えているのは、前者のほうで、技術力とあわせて経営力も身につけていただきたいということから、６次産業化についても学んでいただきたいと思っています。1年間の学習を終えた後も、さらに学びたい人にはマスター制度を設けて研修を受けていただけるようにしております。

○福島氏　　最後に、余田課長に一言お願いします。

○余田氏　　まずは「農の学校」の卒業生を送り出し、有機農業の実践を発信していきたいと思っています。そして、市民総がかりで丹波市の地域ブランドを完成させたいと思っておりますので、御支援をよろしくお願いします。

○福島氏　　ありがとうございました。

市長には最後に閉会の挨拶をしていただきますので、徳山先生から一言お願いします。

○徳山氏　　丹波市在住の若い就農者が黒豆をフェイスブックで発信していますが、写真の撮り方が上手いので、それに引かれて買い求めたところ本当に美味しかった。このような形で農業とつながりたいと思っている消費者はたくさんいると思います。丹波市の農のブランド化をすすめていけば、新しい展開が出て、若い人たちがこの地で農業をしてみたいと来てくれるのではないかと思っています。

○福島氏　　本日は、３人のパネリストの方々に丹波市のブランドの確立につきまして、それぞれのお立場から熱い思いを述べていただきました。

私どもの大学は、地域が先生だという認識で、地域とのしっかりした連携の中で、学生を育てております。農のオーソリティーもかなりいますので、そういう点からも御協力できればと思っています。本日は長時間ありがとうございました。

３人のパネリストの方に大きな拍手をいただきたいと思います。（拍手）

アンケート集計結果

【アンケート実施概要】

参加者数	76人		
回答者数	32人		
性別	男性：27人	女性：4人	回答なし・不明：1人
回収率	42％		

【Q1】「プレイスブランディングによる地方創生～丹波市における農のブランド化の挑戦～」

満足	やや満足	普通	やや不満	不満
11人	18人	2人	0人	0人

※回答なし・不明：0人

■感想

・非常に分かりやすい内容でした。丹波市の新規就農者からの意見をもとに市の農の課題をあぶりだしていただき、今後の支援につなげていければと感じました。
・横文字が多く、参加者に戸惑いの声があった。資料を準備すべき、耳だけでは限界がある
・具体的な姿が十分に理解しにくい。丹波の良さは理解できるが、次のステップはどうか
・物のブランド化地域のブランド化をわかりやすく伝えてもらったのが良かった
・丹波市の具体的プロモーションの可能性をうかがえる内容で良かった。
・ポートランドの話は分かりやすく面白いが、全般的に横文字が多く大学の講義調なのでもう少し話し方を地域の方向けに考えた方が良いのではないでしょうか？
・ポートランドの事例、又、地域連携の考え方、農の学校や企業支援など具体的な提案が聞けたこと

【Q2】「開学記念シンポジウム」について

大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった
9人	18人	4人	0人	0人

※回答なし・不明：1人

■感想

・自分は行政職員であるがまだ知らないこと(農業やブランディング政策について)が多いということに気づくことができ、非常に勉強になった
・具体的な施設を例にした話題について議論がありよかった
・内容についてはすごく良かったが、もっと会場との意見交換をしてほしかった

・目指す姿に対するアプローチ、実現の方法として、売り込み方等の視点も加えながらシンポジウムを進行されてよかった。

【Q３】「福知山公立大学に期待すること」について

・行政職員はどうしてもゼネラリストな面が強いので専門的な分野の相談窓口となってほしい
・府県は異なっても一番地域に近い大学として丹波市にも関わりを増やしていただければ幸いです
・地域連携 (丹波市との) 強化　丹波への人材流通、交流をもっと深めてほしい
・地域貢献を大学ならではの方法を「知の満足」このような、機会を続けてほしいです。
・地域にねざす人材育成に期待したい
・今後も継続して (毎年) テーマを設定して講演会をお願いします

【Q４】その他、ご意見やご感想等あれば

・若者との共同協働をめざしたい
・要は農業はもうからないから熱が入らない。儲かるようになれば、もっと多くの人が参入する。有機と簡単に言うがなかなかむずかしい
・パネリストに行政以外の人も参加して良かったのでは(流通業者、就農者等)
・全般的に大学の先生の講義よりも活動家の方の話の方がわかりやすいと思います。

【Q５－１】性別は？

男性：27人	女性：4人

※回答なし・不明：1人

【Q５－２】年齢は？

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代以上
0人	3人	0人	5人	11人	10人	3人	0人	0人

※回答なし・不明：0人

【Q５－３】お住まいは？

市内：25人	市外：3人

※回答なし・不明：0 人

【Q６】この講演会は何でお知りになりましたか？（複数回答あり）

ちらし	ホームページ	新聞	知人から	その他
18人	2人	3人	7人	6人

※回答なし・不明：0人

■その他具体的に

・丹波市から　・職場　・行政からの連絡

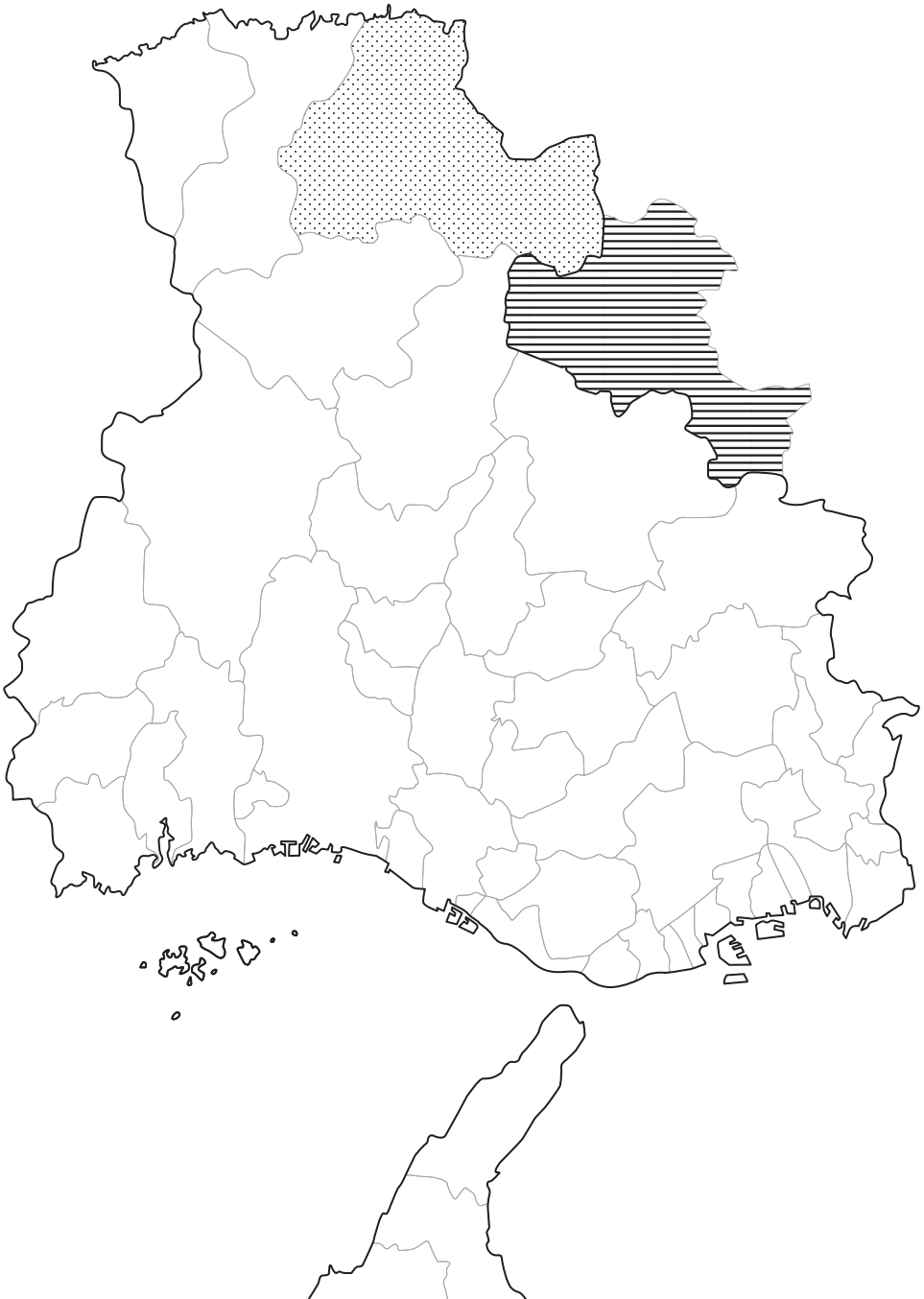
【Q７】講演会を受講する際に参加しやすい時間帯はありますか？（複数回答あり）

平日午前	平日午後	平日夜間	土日午前	土日午後	土日夜間	その他
0人	2人	6人	8人	20人	3人	0人

※回答なし・不明：1人

開学記念連続講演会（豊岡市）

観光とアートの親和性



4

福知山公立大学
開学記念連続講演会
第4回 豊岡市

観光とアートの親和性

2017
12/9(土)

13:00～16:00
豊岡市役所大会議室（2階）
入場無料 ※定員150名 先着順

基調講演

講師：平田（ひらた） オリザ 氏　劇作家・演出家

1962年東京生まれ。城崎国際アートセンター芸術監督、豊岡市文化政策担当参与。こまばアゴラ劇場芸術総監督。劇団「青年団」主宰。大阪大学特任教授、東京藝術大学特任教授、四国学院大学客員教授。1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。2003年日韓合同公演『その河をこえて、五月』で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。2006年モンブラン国際文化賞受賞。2011年フランス国文化省より芸術文化勲章シュヴァリエ受勲。

Hirata Oriza

平田 オリザ 氏

中貝 宗治 氏
豊岡市長

1954年豊岡市下宮生まれ。京都大学法学部卒業後、兵庫県職員を経て、1991年４月より兵庫県議会議員。2005年５月より豊岡市長（現在４期目）。

×

開学記念鼎談（ていだん）

平野 真 氏
福知山公立大学 教授

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程国際関係学専攻。専門分野は、地域経営論、起業論、イノベーション論、技術経営論。

兵庫県豊岡市中央町2番4号　P有

会場MAP　豊岡市役所

福知山公立大学
The University of Fukuchiyama

お問い合わせ
北近畿地域連携センター Kita-re
0773-24-7151
〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
FAX ／ 0773-24-7152
Mail ／ kita-re@fukuchiyama.ac.jp

●共催　福知山公立大学・豊岡市

講演（要約）

○平田オリザ氏　　今、豊岡市は２～３年後をめどに観光とアートの専門職大学をつくるべく動いています。開学の暁には、経営学の強い福知山公立大学さんと連携してキャンパスを行ききし合うような関係を築きたいと思っていますので、よろしくお願いします。

私は内外で演劇の公演活動をしていますが、きょうは文化によって都市の再生に成功した実例を中心にお話しします。世界でも最たる成功例は、フランスのナント市です。７０年代には若者の失業率が５０％にも及ぶ衰退した造船の町でしたが、新しい市長が「文化によって市を再生する」と宣言し、当初誰も信じませんでしたが、疲弊した町を見事によみがえらせたのです。彼は放棄されていた巨大工場をギャラリーやスタジオのあるアートセンターに改修し、市で買い取った古いアパートにパリから呼び寄せた若い芸術家を住まわせ、そして、安い値段で演奏を楽しめるワンコイン演奏会などユニークな文化的イベントを打ち出しました。

その結果、フランスで最もアーチストにやさしい町というイメージが行き渡ります。もともと温暖でカキなど食材も豊富で古い歴史もある土地柄なので、ナントのイメージアップにつれて早期退職した富裕層がパリなどから移住してくる。それに伴い、住民税の税収もふえる。市はそのお金で豪華客船が停泊できるように港を改修するなど、観光客誘致に努める。また、ナントの造船所がつくるハイスペックな豪華クルーザーが売れるようになり、新しい形で造船産業もよみがえりました。どん底を経験して初めてこうした斬新な手が打てるわけです。

大阪は、７０年の大阪万博で、６，４００万人もの人を呼ぶ大成功を収めたものの企業の本社の東京移転などで、８０年代から衰退傾向が見えるようになりましたが過去の成功体験にすがりつくばかりで元気を回復できず「大阪病」と言われています。

そんな大阪にあって、活性化の最たる成功例が大阪の天神橋筋商店街です。商店街の旦那衆みずからが２億円の寄附を集め、天満宮境内に６０年ぶりに天満天神繁盛亭という寄席を復活させます。意気に感じた桂文枝師匠が吉本興業にかけ合って若手の落語家を優先的に高座に上げるようにした結果、今や昼夜満員、１カ月先のチケットでも手に入れにくいほどの盛況です。

客席はわずか２００席ですが、この寄席の誕生によって商店街の通行人は１日に２万５，０００人、年間では１，０００万人に及ぶ日本で最も活気のある商店街となりました。同商店街では商店街の端から端まで歩いた人に「満歩状」を渡していますが、これは寄席がはねた後、居酒屋での雑談の中ではなし家が「この商店街長過ぎるね」といったことにヒントを得て生まれました。おもしろいア

イデアはすぐ生かそうというわけですが、これは、はなし家が町に入り込んでいった効果ではないかと思います。

青森県の八戸市は、かつて市の中心部でも休日の商店街は閑散としていましたが、平成２３年につくられた「八戸ポータルミュージアム　はっち」が活性化の切り札となりました。ここには、いろんな活動ができる多くのワークショップスペースや宿泊施設もあり、市民やＮＰＯなど年間１００万人が利用しています。その波及効果で、開館の1年後には市街地の通行量が３０％アップし、２３の空き店舗が埋まりました。

オープンして1か月後に東日本大震災が起きましたが、幸い建物は被災せず、周辺の居酒屋さんが炊き出しをして被災者を支援し、復興のシンボルにもなりました。この居酒屋さんたちが、年に1回「酔っ払いに愛を」という催しをやっています。白塗りのダンサーがいきなり入って来て１０分ほど踊って去っていくだけのことですが、ダンサーがいつ入って来るかわからず、盃を重ねて待つのでもうかるという趣向です。

はっちの近くに「八戸ブックセンター」という市営の書店がありますが、ここも町の活性化に大きく貢献しています。図書館にはカフェを初めハンモックに揺られながら本が読める空間や本好きの市長さんが書いた書評を展示したコーナーなどがあります。売られている本の大半は専門書ですが、民業を圧迫しないように市内の本屋さんを通じて仕入れます。

この書店は、本を読む人をふやすという市の政策から生まれたものです。一昔前には、八戸の人は紀伊国屋書店のある弘前へ本を買い出向いていましたが、今では流れが逆転、弘前の人が八戸に本を買いに来るようになり、弘前にいる私の知人も「八戸に負けた」と言っています。行政と民間の努力で町が元気を取り戻し、Uターンもふえています。

豊岡市は、「この町で世界に出合う」を合い言葉に、世界中からアーチストを迎え入れて町の活性化を図っています。その核となっているのが、平成２６年にオープンした「城崎国際アートセンター」です。これはかつてお荷物だった県の大研修施設を創作や公演活動ができるように改修したものです。私は、６年前に講演を頼まれて豊岡を訪れたのが縁で、このお荷物施設の改修やその後の活動のお手伝いをしてきました。

招き入れたアーチストには、滞在中、センターで自身の創作活動に専念してもらうとともに、地元の学校に出向いて生徒たちにダンスの指導をしてもらうという形で地元の人との交流も図っています。経歴などをきちんとチェックした上で迎え入れますが、短期的な成果は求めず、構想を練るだけでも３カ月間ただで宿泊できるという緩やかな条件なので希望者が相次ぎ、かつて旧施設のときにはわずか３

０日だった年間利用日が、オープン年度は３３０日に及びました。

ここで創作した演劇やダンスを外国で上演する際には、必ず「豊岡市城崎国際アートセンター」というクレジットを明記するという契約なので、トヨオカ、キノサキの名はたちまち世界中に知れ渡り、「景色もきれいで、いい温泉や旅館があるんだったらぜひ行ってみたい」ということになります。

富良野市は、今や北海道の代表的な観光地ですが、これは地道な取り組みがあってこそです。富良野はもともと純農村地帯で香水の原料となるラベンダーの生産地でした。ところが７０年代に人口の原料が使われるようになり、畑からラベンダーが消えた。ところが１軒の農家がラベンダー畑を残していて、それを当時の国鉄がディスカバージャパンのキャンペーンポスターに使ったのがきっかけで、若者や写真愛好家たちが押し寄せ、テレビドラマ「北の国から」の放映も追い風になって富良野ブームとなりました。

しかし、富良野は一過性のブームに終わらせないで、自然を守りながら、ラベンダー畑での作業体験や香水工場での見学など地道な取り組みで長期滞在型のリゾート地につくりかえていきました。第一次産業を第３次産業にうまく転換したいい例です。

お隣の芦別市には、五重の塔や観音像を型どった大きなホテルが建っている観光地があります。私は真冬に訪れたことがありますが閑散としていました。ところが、富良野は積雪２メートルの時期でもにぎやかです。というのは「ふらの演劇工房」が２月いっぱいミュージカルのロングランをやり

ます。観客は大阪の修学旅行生で、彼らは昼間スキーを満喫して、夜は面白いミュージカルを楽しむわけです。

オーストリアのウイーン国立劇場では、毎日違うオペラを上演しています。これには、観光客にウイーンで泊まってもらおうという意図があります。今、ヨーロッパは飛行機の運賃が安くなって、1万円で主要な都市間が行き来できます。だから、昼間はロンドンやパリ観光を楽しんでも、夜はウイーンに来てオペラを見てお泊りくださいというわけです。ウイーンのオペラ座は収容数が2，000人です。チケット代1万円のほか、飲食費、宿泊を含めて1人が5万円使うとしたら、1回で1億円の経済効果があるわけです。

大阪万博では、月の石を見ようと長打の列ができましたが、今や、よそから珍しいものを持ってきて展示したり、でかいホテルを建てたりするだけでは、観光客は来てくれません。自分たちが地域の価値を見つけ出し、それに付加価値をつけてどう売るか生き残りのかぎです。

豊岡市では、ふるさと教育と、英語教育とコミュニケーション教育を3本柱にして教育改革を進めています。自分の人生にとってどこが住みやすいところなのか、自分を豊かにしてくれるのはどこなのかといったことを自分自身で考えられる自己決定能力を育むのが狙いです。この自己決定能力を育てることと、まちづくりは車の両輪だと思います。まちづくりだけ進んでも自己決定能力が育っていないと、子供たちは人がつくった指標でもって地域を離れていってしまいます。

私は2年後に豊岡に移り住みます。まちづくりは市にお任せするしかありませんが、教育と文化政策については責任を持って頑張りたいと思っています。

また、専門職大学ではアートといろんなものを結びつけられる企画力のある人材を育てたいと思っています。

ありがとうございました。

鼎談要旨

○平野真氏　　平田先生のお話を受けまして、まず中貝市長からお話しください。

○中貝宗治市長　　ホットなところで、２日前、平田さんに男の子が生まれました。平田さんは御自身が豊岡に移ることと、劇団の青年団の本店も豊岡に移すことを公にされています。劇団の倉庫は既に江原に移っていて、江原や日高の人たちは大変な歓迎ムードです。先ほどの、アートと観光のお話にあったようなものが一気に見えてくるのではないかと私も期待しております。

○平野真氏　　「城崎国際アートセンター」は、市長の思いつきが始まりとのことですが、どのようないきさつですか。

○中貝宗治市長　　城崎大会議館は欲しかった県有地を得るために交換条件として不本意ながら県から譲り受けました。使い道に頭を痛めていたとき、ふと劇団にただで貸すことがひらめいたんです。そんな折、平田さんが「これはすごく可能性がある」と言われていると聞き、構想策定委員会のメンバーに入っていただきました。私は秋田のわらび座と古いつき合いがあった関係で、国内の劇団しか頭になかったんですが、委員会の案では「城崎インターナショナル・アートセンター」となっており、世界を視野に入れていました。インターナショナルは長いので、国際に変えてもらいましたが、平田さん自身もおっしゃっているように思わぬ大成功となり、コウノトリの神様のおぼしめしではないかと、本当にびっくりしています。

○平野真氏　　ふつう演劇と地域の活性化とは無縁と思われがちですが、どういうところで演劇ということがひらめいたのでしょうか。

○中貝宗治市長　　さっき話しましたわらび座とのつき合いからです。阪神淡路大震災のとき、私は、わらび座のメンバーに同行して避難所回りをしましたが、腹の足しにもならないのに音楽や踊りが被災者の子供も大人も元気づけているさまを目の当たりにしました。あれが原点だと思います。

○平野真氏　　平田先生は、たまたまこの地に来られてセンターにかかわられることになったわけですが、城崎や豊岡をどう感じておられますか。

○平田オリザ氏　　城崎の町はアートと非常に親和性があるところです。一つは、志賀直哉の「城崎にて」の影響で、私たち作家にとっては、城崎にいるといい作品が書けるんじゃないかというイメージがあります。もう一つは、ヨーロッパのアーチストにとっては、城崎には彼らがイメージする日本が凝縮している町並みがあり、ここにこそ日本があったみたいに感じるんです。ヨーロッパのアーチストたちは、パリ-東京-鳥取の航空券を買ってやってきます。パリで買えば、パリ-東京間と同じ料金です。東

京だと高い宿泊費が要りますが、アートセンターでは宿泊費がただで創作活動ができるので外国人アーチストは喜んで来るわけです。

○平野真氏　　古い伝統のある町に新しいジャンルの演劇を持ち込もうと思われたのはどうしてですか。

○中貝宗治市長　　私としては、温泉の町に演劇があれば楽しいなぐらいの思いでしたが、平田さんのお話にもあったように、城崎は、かつて旅館の旦那衆が文人を受け入れて交流してきた伝統もあります。そのことを思い起こしたこともありますし、実利的な計算もありました。アートセンターをアーチストにただで貸しても、彼らの活動によって観光客がふえれば、町が潤うだろうと考えたからです。

○平野真氏　　立派な公共施設がありながら、持て余しているところが多くありますが、なぜ思い切って変えていけないと思われますか。

○中貝宗治市長　　他の地域のことはわかりません。ただ、私の場合でいうと、コウノトリの野生復帰に２６年間かかわっていますが、取り組みを始める際、何とかこの町を突き抜けさせたいという強い思いがありました。それがうまくいって、私自身の自信になり、町の自信にもなっていったのではないかと思います。ですから、平田さんにセンターの件で協力をお願いしたときも、この思いを伝えました。ここを突き抜けていけば、発展の突破口が開けるのではないという期待感もありました。要は、何とかしたいという思いと覚悟があったからだろうと思います。

○平野真氏　　平田先生が取り組みをされている中で、地元の人たちの反応をどう感じておられますか。

○平田オリザ氏　　最初、人々の反応は「アートセンターって何ですか」といったものでしたが、最初から私たちの取り組みを一番支援してくださっているのが、城崎の旅館のおかみさんたちです。京都や東京の出身の方が多く、かつてバレエを習っていたとか日舞の名取りなどの方もおられ、ジャンルこそ違えアートに関心のある人たちですので、私たちの取り組みをよく理解していただいています。私が城崎小学校で演劇指導をしているのを、授業改革を考えておられた当時の教育長さんがごらんになり、３年かけて市内全校実地へつながったケースもあります。ただ、私たちの取り組みは見ていただかないと理解していただけません。理解していただくとことが運びますが、それまでが大変です。

○平野真氏　　短期間で成果につながった要因は何だと思われますか。

○中貝宗治市長　　平田さんとの出会いが一番大きいと思います。アートだとか観光といった分野は、役所にはノウハウがありません。その意味ではその分野ですぐれたノウハウを持っておられる平田さんとの出会いは、本当に幸運だったと思います。平田さんは、まず一つの着地点で実績の具体例を見せて、信じなかった人を信じさせ、そして次の着地点に向けて引っ張っていく。そういう形でことを着々と進められています。もちろん、市職員の地道な努力や市民の協力、ＰＲ戦略での外部の専門家の方々の協力なども多く得ており、推進力となっています。

○平野真氏　　私は、最初、豊岡市が演劇やコミュニケーションで立ち上がろうとしていることがピンときませんでした。しかし、よそから宝物を持ってきて見せる時代からその地にある価値を発見する時代に変わってきているとか、アートも教育も経済も一体的に考えるべきであるという先生のお話を聞いて、私たちが経営学で教えていることに通じるものがあると思いました。今は、経営が行き詰っている時代であり先生の取り組まれていることが経済、経営の話にも合致するからこそ関心が集まるのだろう思いますが、その辺、どう感じておられますか。

○平田オリザ氏　　演劇ということでいえば、私は、かつてモンブラン国際文化賞という賞を受賞しましたが、その賞を設けている会社の日本支社長のイギリス人と話しているとき、日本の学校では演劇を教えていないというと彼は驚いて、「だから日本人は表現力が乏しいんだね」といいました。イギリスの学校では、演劇はコミュニケーション能力をつけるための基礎教養なんです。アメリカの大学の場合でも経済や心理学が主専攻であっても副専攻で演劇を学んでいると就職に有利ですが、日本ではそうではありません。観光に力を入れている豊岡や富良野の学校が演劇を受け入れてくれたのは、直感的に演劇を学ぶ意味を感じとったからだろうと思います。

○平野真氏　　最後に、お二人から一言、御発言をお願いします。

○中貝宗治市長　　コミュニケーションというのが、きょうの一つのキーワードですが、ＡＩが今後どんどん普及してきて、日本人の仕事の半分は２０３０年にはＡＩにとってかわられ得るという研究もあります。人間の仕事として残るのは哲学や神学など抽象的な概念を組み立てる仕事や共感、あるいは交渉といったところだと言われています。共感のベースは、対話であったり、コミュニケーションであり、その中から共感が生まれてきますが、ＡＩが普及するのは今の子供たちが大人になったときです。だから豊岡は、教育の基本に共感する能力とか対応する能力、コミュニケーション能力、表現力を入れようとしてしています。

もう一つは、観光との関係です。今、専門職大学は平田さんが座長になって、専門家委員会が県のほうに設定されて進んでいますが、観光の町として残るには訪れる人たちといいコミュニケーションをとれることが重要です。その意味で、そうした能力を養う演劇やダンスなどのアートは観光にとって不可欠の要素になると考えています。

○平田オリザ氏　　私からも二つ、一つは、教育の仕事を通じてよい市民をつくりたいと思っています。今の小中学生は出石町民とか日高町民と思っている生徒はいません。みな豊岡市民だと思っています。アートによって市民が一体となってもらえればありがたいと思います。

もう一つは、１０年先をめどに豊岡で国際演劇祭を開催して専門職大学との両輪で豊岡を演劇の町にできればと真面目に思っています。国際演劇祭は東京のような大都市ではできません。映画際を持っているカンヌは人口７万、世界最大の演劇祭を持っているアヴィニョンでも人口９万です。

豊岡にはそのための施設も宿泊施設もたくさんありますから、可能性は十分あります。

○平野真氏　　長時間ありがとうございました。聴衆の皆様にもお礼申し上げます。ありがとうございました。

アンケート集計結果

【アンケート実施概要】

参加者数	110人		
回答者数	55人		
性別	男性：39人	女性：14人	回答なし・不明：2人
回収率	50％		

【Q1】「観光とアートの親和性」（劇作家・演出家 平田 オリザ氏）について

満足	やや満足	普通	やや不満	不満
47人	5人	0人	0人	0人

※回答なし・不明：3人

■感想

・具体的な成功例、失敗例を示してもらい分かりやすく、楽しい話でした。
・自己決定能力を高めることの重要さ、話にリズム感、広さ、ひきこまれました
・文化の自己決定能力、ソフトの地産地消など心にしみる言葉がありました。
・「文化の自己決定能力」この言葉が一番印象に残りました。他人の指標で決めない。自分で決める。このことが一番大事だということがわかりました
・何が問題で何がどうなっているのか課題を明確にわかりやすく、将来の展望に光明を感じられました。
・仏ナント市の造船業がナントブランドの認知とともに復活した逸話は豊岡の製造業のブランド化の参考にできないかなどと考える機会になった。
・今後の地方都市の在り方はもちろん、経済や社会のからくりや、考えるべきことなど、実生活に結びつけて考えられる良い内容だった。
・大阪、天神橋商店街の話がおもしろかった。大阪、ユニバーサルスタジオの話が印象に残った
・アートとカルチャーの重要性など具体例で示して頂き、わかりやすく、参考になりました。

【Q2】「開学記念鼎談」について

大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった
31人	14人	4人	0人	0人

※回答なし・不明：6人

■感想

・福知山公立大学と豊岡市との協力、お互いに知識を共有できることを期待
・コミュニケーションの大切さ、演劇とコミュニケーションのつながりをもっと知りたいと思いました
・本当にこれから大きな力となりうる年代、リーダーとなりうる人があまりにも少ないことに不安を感じています。
・市長、劇作家、教授の様々な視点から考える”豊岡”についてよくわかりました。
・よいヒント多く得られましたので福知山の文化事業政策に生かされればとてもうれしいです。
・やりたい事をすすめていくには地道なコミュニケーションが必要だとわかりました。
・アート、コミュニケーション、観光の関係が良く分かった

【Q3】「福知山公立大学に期待すること」について

・豊岡にできる大学と連携して、北近畿地方の発展に寄与してほしい
・地域、福祉医療の経営を観点としたということに将来性を感じる。
・働きながら学べる場を提供していただきたい
・地域に根づいて、地域の活性化を担う中心的な存在になってほしい
・数少ない近畿の日本海側の国公立大学として、他の有名大学にひけをとらないくらいのレベルを保つとともに、地域の特性を活かした学問ができることを望む。

【Q4】その他、ご意見やご感想等あれば

・自身で起業する人をふやす、豊岡の事業を大事にすることが必要ではないかと思う
・地方が目指すものが、わかりました。都市部にない環境と文化を大事にしてのばしていこうと思いました。

【Q5－1】性別は？

男性：39人	女性：14人

※回答なし・不明：2人

【Q5－2】年齢は？

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代以上
0人	1人	6人	13人	21人	12人	1人	0人	0人

※回答なし・不明：1人

【Q5－3】お住まいは？

市内：38人	市外：8人

※回答なし・不明：4人

【Q６】この講演会は何でお知りになりましたか？（複数回答あり）

ちらし	ホームページ	新聞	知人から	その他
34人	5人	1人	10人	3人

※回答なし・不明：4人

■その他具体的に

・職場　・ポスター

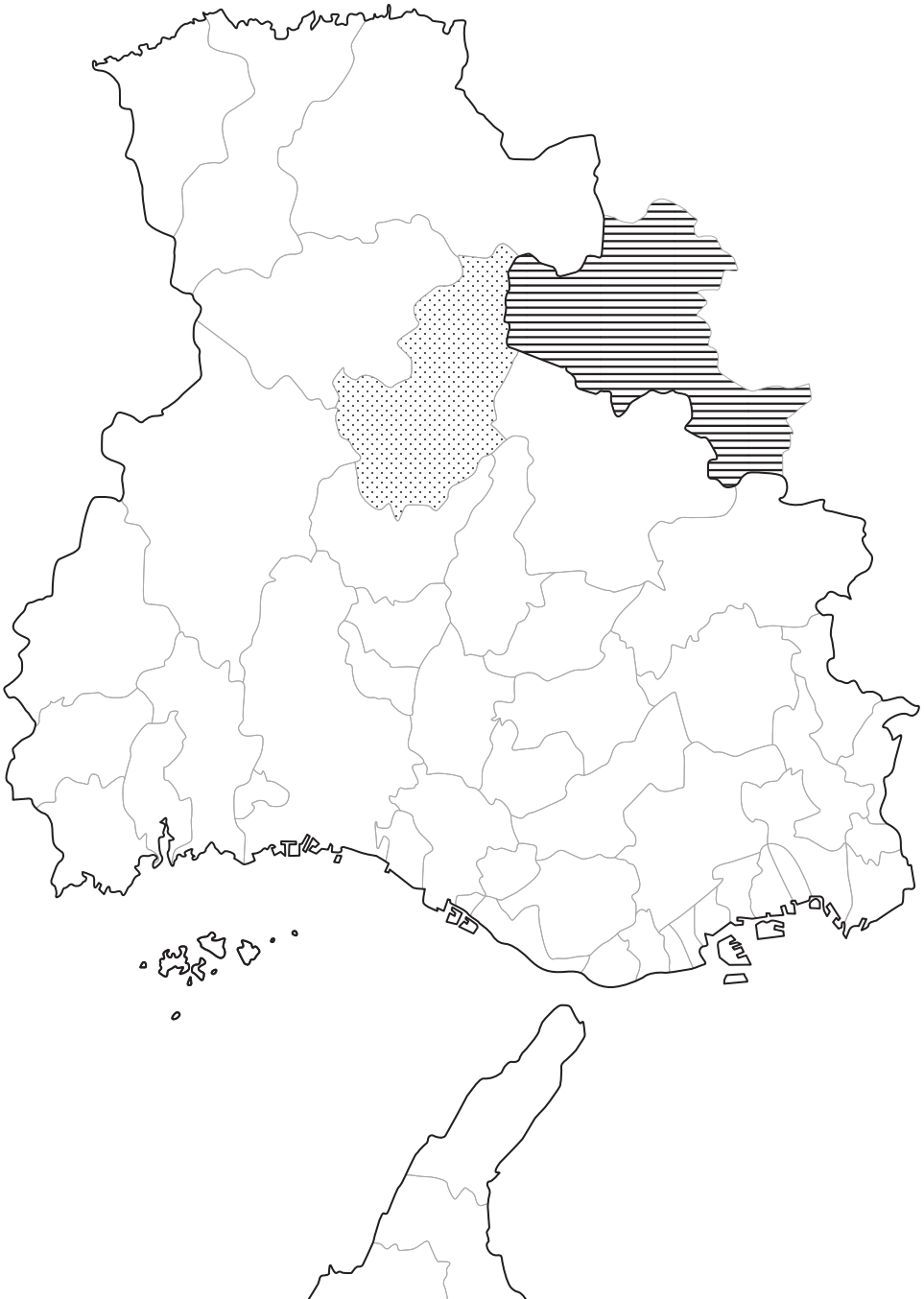
【Q７】講演会を受講する際に参加しやすい時間帯はありますか？（複数回答あり）

平日午前	平日午後	平日夜間	土日午前	土日午後	土日夜間	その他
2人	6人	8人	14人	30人	2人	1人

※回答なし・不明：2人

開学記念連続講演会（朝来市）

地域自治協議会の始めかた・進めかた・育てかた



5

福知山公立大学
開学記念連続講演会
第5回 朝来市

平成29年度 協働のまちづくりフォーラム

地域自治協議会の始めかた 進めかた 育てかた

2018
2/4(日)

13:30～16:30
あさご・ささゆりホール
入場無料 ※定員300名 申込不要

基調講演

講師：川北（かわきた） 秀人（ひでと） 氏
IIHOE 人と組織と地球のための国際研究所 代表者

1964 年大阪生まれ。87 年京都大学卒業後、（株）リクルートに入社。広報や国際採用などを担当して 91 年退社。その後、国際青年交流 NGO の日本代表や国会議員の政策担当秘書などを務め、94 年に IIHOE 設立。市民団体のマネジメントや、企業の社会責任（CSR）への取り組みを支援するとともに、NPO・市民団体と行政との協働の基盤づくりを進め、毎年約 60 の自治体で、職員や市民との合同研修を担当。

Kawakita Hideto

開学記念鼎談（ていだん）

川北 秀人 氏

多次 勝昭 氏
朝来市長

1949 年朝来市生まれ。龍谷大学法学部卒業後、和田山町に奉職（2005 年～朝来市）。2009 年 5 月より朝来市長（現在 3 期目）。

×

杉岡 秀紀 氏
福知山公立大学 准教授

2007 年同志社大学大学院総合政策科学研究科博士前期課程修了。NPO きゅうたなべ倶楽部（代表）、内閣官房行政改革推進本部事務局、京都府立大学公共政策学部講師を経て、2016 年より現職。

兵庫県朝来市新井73-1　P有

会場MAP　あさご・ささゆりホール

お問い合わせ
北近畿地域連携センター Kita-re
0773-24-7151
〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
FAX ／ 0773-24-7152
Mail ／ kita-re@fukuchiyama.ac.jp

●共催　福知山公立大学・朝来市

福知山公立大学
The University of Fukuchiyama

講演（要約）

○川北氏　　みなさん、こんにちは。本日ご依頼いただいたテーマは、「地域自治協議会の始め方、進め方、育て方」ですが、「始め方」は既にわかっておられると思いますので、「進め方と育て方」を中心にお話しさせていただきます。

私どもが市民団体対象の勉強会を始めてから２４年になりますが、最近１０年間の最も大きな変化は、自治会・町内会の連合会にお招きいただく機会が増えたこと。また1年の半分は、日本海に面した自治体にお邪魔しています。その背景には、地域の状況が変わってきたことがあると考えます。地域に子どもが多かった時代は、子どもも親もおじいちゃん・おばあちゃんも楽しめる「行事」をしていればよかった。しかし、子どもが減ってきて、おじいちゃん・おばあちゃんが増えてくると、その見守りや、お弁当を届けるといった「事業」が必要となってきました。

本市では、これに早く気付かれて、１０年ほど前から地域自治協議会をつくられたわけですが、今、そういった市町村は全国各地に広がっており、「小規模多機能自治推進ネットワーク会議」には、人口５０万超の自治体も入っています。最近では、政令指定市である浜松市でも、昨年末に、市長が「本市も小規模多機能自治をやる」と宣言されました。浜松市は人口７０万人超で新幹線も止まります。そういったところでさえ、本市や島根県雲南市などに習って、小規模多機能自治をやると言っています。

なぜか。日本全国どこであれ、人口減少と高齢化は今後避けて通れないからです。東京でさえ２０２０年から人口が減り始めます。また、最近の国勢調査では５３００万世帯の約４割が「ひとり暮らし」で、今やこれが、かつての保護者２人と子ども２人の計４人に取ってかわる、我が国の「標準世帯」になっています。

もう一つの変化は、働き方です。現在７０歳代の方々が３０歳代だった昭和５０年代には１次産業と２次産業を足すと５割を超していましたが、今では３割。現在、働き手の３人に２人は３次産業で働いています。温泉街などの観光地では、観光客の多い土・日には運動会ができないと言われています。

社会がここまで変化すると、自治会・町内会の役割も、イベントをやって地域のにぎわいをつくることから、地域の中での「支え合い」の仕組みをいかにつくるかへと、進化が求められます。浜松市と同様に、自治会のあり方が今までと同じでいいのかということを、大都市でもようやく気付き始めたのです。「小規模多機能自治推進ネットワーク会議」の会員のある市では、市長さんが「行政力は残念

ながら限界を迎えつつある。しかし行政力の限界が、地域力の限界であってはならない。だからこそ住民力が大切。これから行政は、残る力を振り絞って住民力の育成に努める」と明言されています。

しかし、各地の自治会・町内会を訪れて気付くのは、地域の問題・課題がわかっていながら、その解決を先送りしたり、状況の変化に伴う地域組織の再編がなかなかできなかったりという地域が多いことです。そんな中で、すごいと思うのは、島根県雲南市の鍋山地区のお取り組みです。鍋山地区は、面積２３平方キロ、高齢化率は４割で、４００世帯余のうち８０世帯が７５歳以上のみの世帯。その見回りをしていた町内会長さんたちのガソリン代などの負担を行政に申し出たものの、補助が出せるわけもなく、結果として、地域住民が水道検診を受託することになりました。月１回の検針の折に、高齢者の顔色や声の大きさ、おうちの片付き具合などを確認して、状況が良くない人がいれば、行政や福祉に連絡をします。

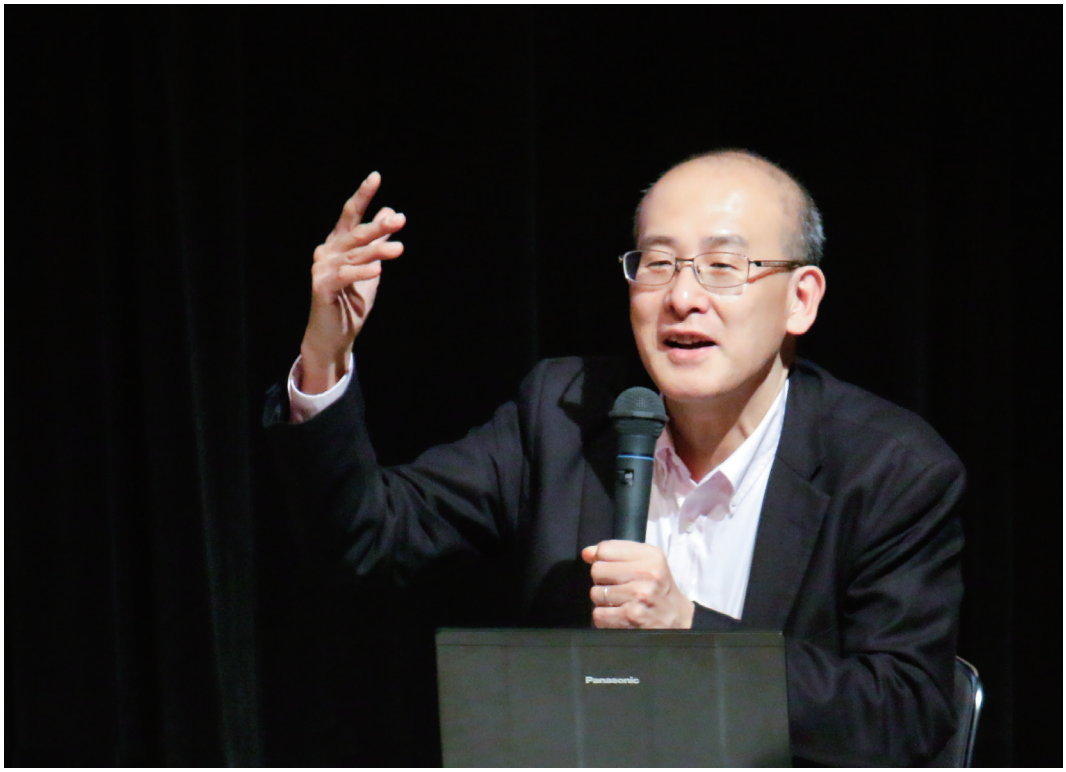
こうしたことができるのは、行政と住民と地域組織が、個人情報の共有に関する協定を結んでいるからです。同市では、地域自主組織がかつての公民館を「地域交流センター」と名を改めて自治の拠点として指定管理を受けており、同組織の指定管理料は年間４５０万円ほどですが、平成２９年度の同組織の予算規模はざっと２，８００万円。つまり、行政から仕事をどんどんとって稼いでいるのです。

このほかにも同市では、多くの地域自主組織が、地区の人口構成や住民の意識や抱える問題などについては「中学生以上の全住民調査」によって地域内で、また、各組織の活動状況は「自慢大会」や「円卓会議」で地域を超えて、地域内外の情報を共有して学び合いながら、よりよい地域づくりを積み重ねる努力を続けていらっしゃっています。

北海道の浦幌町は、未来を見据え、子どもたちをまちづくりの担い手に育てるすばらしいお取り組みをされています。同町は北海道の東南部に位置し、面積は朝来市の約２．５倍ですが、人口はわずか５，０００人です。同町にＩターンで漁師になった方の働きかけにより、小学校から中学校までの総合学習の時間を最大限に活用した「地域おこし授業」を行っていらっしゃいます。小学４年生は、同町の開拓創生世代の孫や曾孫にあたる、７０歳代以上のおじいさん・おばあさんたちから、氷の大地を緑の大地へと切り拓いて来られたお話を聞き、それをまとめて発表します。

小学校５年生になると農作業体験が始まり、６年生になっても続け、修学旅行先の札幌で、おじいさん・おばあさんたちと一緒に育てた野菜を売ります。　中学校に入ると林業や漁業も体験し、中学３年生は、今後のまちづくりについて、町長をはじめ２００名ほどの聴衆に提案します。２００９年の卒業生は「この町にはシンボルがありません」と、自分たちが描いたイラストを持参し、それが今で

は町のシンボル・キャラクターになっています。２０１３年の卒業生の提案は「この町にはお土産がありません」というもの。それを聞いていた町のパン屋さんが触発され、卒業式の日に、卒業生全員にパンの試作品をプレゼントしました。



添えられた手紙には「我々大人たちは、みなさんが考えてくれた町おこしの企画提案の実現に向けて、努力していきます。みなさんは浦幌の宝物です。私たちはいつまでもみなさんを応援しています。」と書かれていました。同町には０８年から高校がなくなり、それ以降、中学生は卒業と同時に、１００キロも離れた他市にある高校に、寮や下宿から通うことになります。

この「町おこし授業」を最初に受けて中学を卒業した生徒たちは、今２４歳。浦幌町内２か所の「道の駅」の店長になり、後輩にあたる中学生に町おこしの指導をしている人もいます。最近では、帯広や釧路にある高校に進学した同町出身の生徒たちが、自発的に「浦幌部」という部をつくって、地元のまちづくりを考え参加する部活動をしていることです。

浦幌町の食糧自給率は２９００％。ＴＰＰが締結されようがされまいが、２０２０年代も２０３０年代も、同町の基幹産業は農林水産業です。子どもたちすべてが一次産業に就いてくれることを期待しているわけではなく、同町で生まれ育った子どもたちに、地域の可能性と課題をきちんと教えてから送り出すのが大人の責任だと考えています。

朝来市でもぜひ、こうした教育を行っていただきたい。学力テストも大事かもしれませんが、そればかりがんばっても、未来の朝来で稼ぐ力は育つでしょうか。学力しか学べない学校に任せるだけでは、結果として、若者たちを朝来市から追い出してしまうことになりかねません。学習指導要領を超える浦幌町のような取り組みは、「教育を通じた地方創生」として、文部科学省が予算をつけています。

地域のリーダーは、もはや「役」を務めているのではなく、地域を「経営」しています。経営者にとって一番大事な仕事は、人を育てること。そのためには、地域の困りごとに、自分だけでがんばるのではなく、住民の方たちが参加しながら、一緒に取り組みながら人や地域を育てていこうよと、道を開いていくことです。

もう一つ、お願いがあります。それは、女性の方にも積極的に自治会・町内会の役員に就いていただきたいということです。　２０１５年の国勢調査を見ると、朝来市内のお一人暮らしの後期高齢者は８９７人、うち男性が２０２人、女性が６９５人。つまり独居後期高齢者の８割近くは女性です。高齢の女性のお悩みや困りごとの聞き役は、男性より女性の会長さん・役員さんのほうが向いているのではないでしょうか。すぐには難しいこともあろうかと思いますが、４０～５０歳代の方から６０歳代、７０歳代の女性の方たちにも、地域の中で担っていただく役割を増やしていただきたいと思います。

今は、地域の総力を挙げて、地域を守り抜く体制へと進化するための大きな転換期です。若い人たちを導き、その力を引っ張り出しながら、未来に備える新しい組織づくりを進めていただければと思います。

御清聴ありがとうございました。

鼎談（要約）

○杉岡氏　　進行役を務めさせていただきます杉岡です。川北さんには浦幌市や雲南市などの実例を通じて、未来を見据えたまちづくりのお話を伺い、同じテーマで研究している者として、共感するところが多々ありました。川北さんのお話の中で、朝来市では教育を通じた地域創生の取り組みをしているのかなどの問いかけもありましたが、川北さんのお話も踏まえまして、朝来市での地域自治協議会の１０年の歩みについて、多次市長の思いを伺いたいと思います。

○多次氏　　私たちは、地域協働の、ある種先駆的な地域だという認識をもってことを進めてきたつもりですが、北海道の修学旅行の話などを聞きますと、頭を殴られたような衝撃を受けました。各自治協議会では、休暇を利用しての子供たちや、高齢者の居場所づくりを初め、防犯パトロール、資源回収、河川の清掃活動、遊休農地の改修、都市部との交流、移住推進の取り組みなど、それぞれの地域の悩み事の解消のために特色ある運営をしていただいております。ある程度の困りごとが組織単独で解決でき、心の寄りどころになっている成熟した自治協議会もあります。何かあったときにすぐに話し合え、助け合える仕組みが既に整っていることは、大きな財産であると思っています。

ただ、全員が自治協議会の会員かというと、クエスチョンマークを打たざるを得ません。また、１０年の歳月を経て、自治協議会が形骸化している側面もあります。市としましては、地域自治協議会の意義を市民の皆さんとともに改めて見直し、皆さんのお知恵をいただきながら、必要な仕組みは再構築して朝来市ならではのまちづくりをさらに推進していきたいと考えております。

○杉岡氏　　ありがとうございました。

市長のお話に関連して、地域協議会への全員加入の意味や、自治協議会の幅の問題、それから、もう一つ、雲南市では個人情報の共有というお話がありましたが、大阪の箕面市でも子供の貧困問題から個人情報保護条例を改正して、本人の許諾がなくても部局間の情報提供や共有ができるようにしましたが、これに続く自治体がなかなか出ないのはなぜか。以上３点について、川北さんにお尋ねします。

○川北氏　　まず、個人情報について、個人情報保護法の趣旨が正しく理解されていないことが最大の問題です。特に行政職員さんたちがわかっていない。「個人情報の保護は大切なことですが、個人情報であれば何でも保護というのは誤解です。地域にとって必要有益な活動のために個人情報が有効に活用されるように正しく理解し、個人情報を適正に管理して、上手に利用することが大事です」。これは京都市北区がまとめた『地域団体のための個人情報の取り扱いに関する手引き』に書か

れている内容です。

個人情報保護法は昨年５月に改正施行されました。それまでは個人情報を５，０００件持っていなければ法の適用は受けませんでしたが、今では５，０００件未満でも同法が適用されることになり、全ての自治会・町内会が対応しなければならなくなりました。しかし市町村の担当者が、わかっていないために、対応が追いついていないのが現状です。

協議会への加入の件については、こんな例をご紹介します。長崎市の鶴の尾地区は、高齢者の独居世帯が多い地域で、そういう方が入院されるたびに自治会長さんが呼び出されて、洗面器やタオルといった生活用品の買い出しを頼まれていらっしゃいました。そこで地域の方々に呼びかけて、各世帯では使わない未使用の生活用品を集めて「入院お助けバッグ」というしくみを始められました。「助かった」と喜ばれる方が多く、結果として、自治会の退会者も減っています。自治会は生命と暮らしを支える活動を行っていることがわかれば、抜けたいという人は減るはずです。

同じ長崎市からもうひとつご紹介したいのは、「救急医療情報キット」と呼ばれる、救急隊員などに伝えたい情報を記入する書式に関する例です。若者のひとり暮らしが多い上長崎地区では、アパート管理会社などの協力により自治会加入率は高いものの、配布した救急医療情報キットの回答率が低かった。会長さんが偶然声をかけた若者に「見た？記入した？」とたずねたとこ「かかりつけの病

院もないし、いつも飲んでいる薬もないので、記入するところがなくて」と言われたことから、同市消防局の救急担当や同市内最大の赤十字病院の救急救命担当医師の方などに「最小限度記入してほしい項目」をたずね、設問を絞り込んだところ、回答率が大幅にアップしました。このように、自治組織が住民にとって、どういう役に立つ存在なのかという「機能」を示すことと、中学生以上の全住民調査など、住民の意見を聞きながら活動を再構成し続けることが重要です。全員参加は義務ではなくて結果であり、それを促す施策になっているかどうかを見直すことが大事です。

また、地域と組織の置かれた状況については、ずっと先まで見る姿勢をもっていただきたい。今、雲南市をはじめとする全国各地の市区町村に対して、「地域経営研究所をつくりましょう」と提案しています。各地域から１人か２人、５０歳代以上の（地域で「若手」「次の次のリーダー候補」と呼ばれる）人を推薦してもらい、その人たちに1年間で計１２日を確保してもらいます。うち３日は既存の研修を受けてもらい、さらに３日は、自分たちと状況の似た集落を見にいってもらう。４日は自分の集落にどういうことが必要かを考え、試行し、その結果を地域で報告してもらい、残る２日間は中間と最終の合同報告会。いわば５０歳代の研究生の人たちが、次の次の地域づくりに必要なことについて、お互いから学び合おうというねらいです。来年度からゼロ予算でスタートする準備をしてもらっています。

地域の多くの方々の懸念は、後継者がいないこと。福知山公立大学は、地域経営や地域公共経営のために開学されたのであれば、その仕組みづくりをお考えいただきたいです。

○杉岡氏　　ありがとうございました。

奥銀谷の方から「朝来市では地域に役場の支所と自治協議会があり、無駄が多いと思う。支所の業務を自治協議会に移して支所の役割を少なくしていくことは可能ですか」という質問をいただいています。

川北さんからも事前に同様の質問をお聞きしておりますので、この点について、多次市長の御意見を聞かせてください。

○多次氏　　支所を置くことにつきましては、かねて御案内のように、合併協議会の際にも役場がそれぞれ本所のみに行ってしまえば、さびれてしまう、あるいは、地域が非常に寂しくなるといったようなことから支所を残すべきというお話をいただき、合併協定の中で決めさせていただきました。合併時よりは若干人も少なくなっておりますが、支所と自治協の併存は無駄ではないか、自治協が役場の一定業務を引き受けたらどうかという御意見につきましては、今後、皆さん方に議論を闘わせていただき、お知恵をいただきたいと思いますので、よろしくお願いを申し上げます。

○杉岡氏　　きょうのテーマの地域自治協議会に関連して、今後、当福知山公立大学に期待するこ

とがあれば、お二人の御意見をいただきたいと思います。

○川北氏　　僕は日立製作所などの役員研修を担当させていただいていますが、その中で「２０３０年の社会がどうなるか」を考えてもらっています。２０３０年に向けたサービスや製品の開発ができないと、企業は生き残れないからです。例えば、高齢者の方々に自動運転の車に乗ってもらうためにはどうしたらいいか。現在４０歳代・５０歳代の「未来の経営者」に、未来のことをちゃんと考えさせる。それをやらなかったら、会社も経済も成り立ちません。そんな４０歳代・５０歳代の人を雇っている経営者の方々には、「まちづくりのためだからこそ、地域に貢献しなさい」と伝えています。地域なくして地域経済なし、地域経済なくして企業の未来なしですから。大学には、地域経営だけでなく、地域経済経営を考えていただける経営者育成をぜひお願い申し上げたいと思います。

○杉岡氏　　ありがとうございました。

地域経済経営という新しいお言葉をいただきました。ぜひとも覚えておきたいと思いますが、ラテン語でプロボノという言葉があります。公共性のために本業を通して地域社会のために役立つという意味ですが、本業を通じて地域にかかわってもらうためののり代、あるいは、伸び代をいかにつくっていくかというヒントをいただきました。

では、市長、よろしくお願いします。

○多次氏　　まず、こうした機会をおつくりいただいたことにつきまして、感謝申し上げます。それとともに北近畿圏におきます唯一の４年制大学として、その存在をさらにアピールいただくとともに、私どもの地域におきまして敷居の低い大学であってほしいと思っております。地域の抱える課題はたくさんございます。課題解決に向けての取り組みについて、さらに一緒になって考えていかなければならないことも、きょうそれぞれがおわかりいただいたのではないかと思っております。そのようなことにつきましても、御相談の乗っていただいたり、考えていただける機会をまたおつくりいただければなおうれしいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

○杉岡氏　　ありがとうございました。

本学は敷居を低くして、と言ってもレベルを下げるということではなくて、レベルをどんどん上げていきながら、皆さんと一緒に前を見て歩むような大学でありたいと強く感じました。

これで鼎談を締めたい思います。改めましてお二方に拍手を送っていただければと思います。どうもありがとうございました。

アンケート集計結果

【アンケート実施概要】

参加者数	２００人		
回答者数	８３人		
性別	男性：７２人	女性：7人	回答なし・不明：４人
回収率	４１.５％		

【Ｑ１】「持続可能な交流型ツーリズム～来訪者と受入地域の共生を目指して～」

満足	やや満足	普通	やや不満	不満
57人	16人	7人	3人	0人

※回答なし・不明：0人

■感想

・少子高齢化時代での具体的な知恵、ヒントが多く聞かれた。大変良かった。
・現自治会長、民生委員だけではなく、次世代のリーダーにも聞いてほしかった。
・進め方、育て方はそれぞれの区域で企画検討実施していくべきだと思う。
・未来の自治会についてよく学べた。データを利用しているのは分かりやすかった。
・イベントをやっていればいい時代が終わった、衝撃的でした。
・内容はとても良かった。地域に当てはめるということと人材育成という観点からなかなか難しいと思った。

【Ｑ２】「開学記念鼎談」について

大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった
41人	15人	2人	1人	0人

※回答なし・不明：6人

■感想

・三者の質問のやりとりを通じて市長の考えを垣間見ることが出来ました。
・実地に基づいた内容で参考になった。
・地域振興の色々なヒントがあり、良かった。
・こういう機会の場に多くの人が参加できればよいと思います。
・これから朝来市と福知山公立大学との関わりが増えていくことにわくわくした。
・住民の一人一人の意識改革が必要であると思った。

【Q3】「福知山公立大学に期待すること」について

・若者ならではの視点でもって朝来市を見てもらい刺激をもらえたらありがたいです。
・地域の研究機関として、行政と共に共同研究、助言、住民に対する意識付けなどに協力をいただきたい。
・地域の活性化となる若い意見をどんどん提案してほしい。また、地域と一緒に取組んでほしい
・地域の課題に向き合ってもらいたい。地域で活躍する人材を育成してほしい。
・将来を担う、考える地域経済経営の育成をお願いします。
・近畿北部の自治活動の核になってほしい。

【Q4】その他、ご意見やご感想等あれば

・今回の研修をさらに深めるため、次回の開催を期待しています。
・個人情報の保護が高齢者支援の障害になっているのではないかと思います。
・地域の役を次の人に渡す方法、就任期間等について考えさせられた。
・大変有意義なお話でした。参考になりました。

【Q5－1】性別は？

男性：72人	女性：7人

※回答なし・不明：3人

【Q5－2】年齢は？

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代以上
1人	6人	2人	6人	12人	40人	13人	0人	0人

※回答なし・不明：3人

【Q5－3】お住まいは？

市内：61人	市外：12人（福知山、豊岡、養父、丹波、綾部）

※回答なし・不明：10人

【Q6】この講演会は何でお知りになりましたか？（複数回答あり）

ちらし	ホームページ	新聞	知人から	その他
47人	0人	1人	5人	29人

※回答なし・不明：3人

■その他具体的に

・自治協　・行政　・市　・区長　・CATV

【Q７】講演会を受講する際に参加しやすい時間帯はありますか？（複数回答あり）

平日午前	平日午後	平日夜間	土日午前	土日午後	土日夜間	その他
3人	7人	13人	14人	44人	7人	3人

※回答なし・不明：8人

福知山公立大学 北近畿地域連携センター

平成29年度福知山公立大学開学記念連続講演会報告書

平成30年3月発行

■ 発行所

福知山公立大学 北近畿地域連携センター

〒620-0886 京都府福知山市字堀3370

福知山公立大学 2号館1階「Kita-re」

TEL. 0773-24-7151　FAX. 0773-24-7152

E-mail　kita-re@fukuchiyama.ac.jp

■ 印刷所

株式会社オカムラ

福知山公立大学

Kita-re

〒620-0886 京都府福知山市字堀 3370
TEL 0773-24-7151　FAX 0773-24-7152　Mail kita-re@fukuchiyama.ac.jp
http://www.fukuchiyama.ac.jp